

ハ死刑ニ處スハキ重罪ノ數ヲ左ノ如ク限レリ
國賊、謀殺、謀殺ヲ希圖シ生命ニ関スル毀傷ヲ共
ハレ已行未成、理情ニ悖ルノ重罪(鶏姦ノ如ク)人ノ
死ニ至ルハキ放火、海賊、謀殺未成、強賊ニ因テ毀
傷ヲ負ワレムル者、夜中ニ襲入ヲナシ家人ニ損
暴ヲ加ヘシ重罪、

然レ氏全般ノ改革ハ十八百六十一年ニ當リ所
謂確定律ナルモ、以テ之ヲ行ヒタリ是レ即
チ同年八月六日成定ノ法ニシテ寺ヲ往時ノ刑
法ヲ取舍シ殊ニ死刑ニ處スハキ重罪ノ數ヲ著
シク減殺セシモノナリ
此法ニ拠リ方今英國ニ於テ死刑罪トナスモノ

旁一 國王ニ對スル大逆

唯、其重大ナルモノニ限ル即チ國王又
ハ王族ノ身體ヲ衝擊スル者其他嘯聚
ノ拳動或ハ暗殺者クハ他ノ暴行等ヲ
以テ準備ヲ為ス大逆

旁二 謀殺

謀殺ノ釋義ハ成法中ニ之ヲ明示セス
ト由モ凡ソ此ノ重罪ハ豫メ熟慮シ以
テ人ヲ殺スルモノヲ指スノミナラズ
判決ノ現況ニ依リ或ハ故殺或ハ折傷
ニ因テ人ヲ死ニ致スモノモ亦之ニ屬
スルナリ然レ氏大抵謀殺ト名クルモ
ノハ豫メ熟慮シテ直接又ハ間接ノ目

的ヲ存スルヲ要ス此間接ノ目的ハ均
 シク殺害ノ一點ニ歸スト由モ尚ホ此ニ
 止ラスレテ他事ニ涉ルカ故ニ正シキ
 原由モナリ又辨解スヘキ理モナクモ
 テ妄リニ他人ノ身体ニ害ヲ加フルモ
 ノナリ其他各種殺害ニ及ビ是レニ對
 スル原因ノ分明ニ至ル迄ハ推テ間接
 ノ目的ヲ評定スル丁トス而メ是ノ對
 証ノ表明スルハ該犯罪者ノ負擔ニ係
 ル
 他ノ各國ト同シク英國ニ於テモ亦死刑ノ疑問
 ヲ紛起シ專ラ立法官ノ突鑿講明スル所ト為レ
 リ

然レ氏是突鑿ハ英國人實際ヲ先キニスルノ素
 意ニ本ウクヲ以テ嘗ニ學術上ノ普通論理ニ拠
 ルノミナラス猶ホ實際ノ經驗ヲ彙メ以テ死刑
 須要ノ經界ヲ定メ其効ヲ保タシメレト欲セリ
 斯ノ經驗ニ由リ千八百四十年「エワルト」氏下院
 ニ於テ叙メテ死刑ノ可廢ヲ建議シ懲戒ノ切ア
 リト為ス説ヲ存クルノ實証トシテ百六十七人
 ノ斬首中其百六十四人ハ曾テ其場ニ踏臨セシ
 者ヲ奉ケ又死刑罪ヲ減少シタル片モ尚ホ重犯ノ
 増加セサリシ丁々徴出セリ且謂ラク其事實ノ
 報告ニ死刑ヲ保持スルヲ以テ需要ト為スノ証
 ヲ表スルハ唯之ヲ主張スル者ノ所為タルノミ
 ト

貴族リセル氏政府ノ代理トシテ此ノ建議ニ抗
 シ死刑ノ懲戒ト為ルヘキ功ヲ以テ重罪ニ陥リ
 タル諸人ニ對シ小補ナキニ非ストセリ然レ氏
 次テ述ル所アリ曰ク予モ亦自ラ起テ死刑ハ之
 ヲ廢スヘルト建議スルノ時機ヲ熟ツト
 當時ルストシトシ及ヒ「子ル氏モ死刑ノ可廢
 ヲ抗論セリ然レ氏下院ノ討議ニ於テ同聲九十
 異聲百六十一ナルヲ以テ此論遂ニ排存セラレ
 時ニエ「ワルト」氏ハ独リ其意ヲ屈セスヲ千八百
 四十七年ニ至リ更ニ此議ヲ共セシカ猶ホ同聲
 四十一ニシテ異聲八十一ナルヲ以テ再ヒ亦排
 却セラレタリ
 千八百四十八年此議復々議事中心ニ加ハリシカ同聲

六十六異聲百二十二タリ次テ千八百四十九年
 ノ建議ニハ同聲五十一異聲七十五又千八百五
 十年ニハ同聲四十二對シ異聲四十六ナルヲ以
 テ皆ナ之ヲ存ケタリ
 千八百四十七年上院ニ於テ特ニ委員ヲ置キ識
 者ニ就テ之ヲ質シ以テ刑法殊ニ死刑ノ施行及
 ビ効用上ノ經驗ヲ類纂セシム
 是時英國刑事ノ全改正ニ係ル成法草案アリテ
 後採用セラレル此委員ノ經驗類纂ヲ贊成セリ然
 レ氏此ノ改正ヲ主張スル者亦諸重罪特ニ死刑
 ニ處スヘキ者ノ趣旨ヲ一定セシメント欲スル
 ニハ「即チ前ニ記シタル」千八百六十一年遂ニ稍
 少シノ持論満足ニ至ル迄長ク他ノ抗撃ヲ被リ

タリ
 千八百六十四年又下院ノ稟請ニ依リ王命ヲ以
 テ更ニ「リヒモンド」公ヲ長トシ其他十二名ノ委
 負ヲ置テ死刑施法ノ性質及ヒ其功用无ニ死刑
 実施ノ躰裁ヲ考究セシム
 是等委員ノ纂輯セシ千八百六十六年一月八日
 ノ報告及ヒ其附録中ニハ特リ英國ノミナラス
 他ノ數國ニ涉リテ汎ク其事實ヲ網羅セリ而ソ
 此ノ十二名中「ルスピン」トシ「ジョン・グリト」子
 「リ」及ヒ「エワルト」ノ四氏ハ直ニ死刑ノ可廢ヲ主
 張シテ曰ク

死刑ハ之ヲ廢シテ妨ケ無キノミナラス却
 テ我社會ノ為ニ有益タリ故リ以テ直ニ

之ヲ廢セサル可ラスト

此他「ハカン」氏モ亦其見ヲ同ウセリ然レハ人民
 ノ意向或ハ未タ此ニ至ラサルヲ恐レテ曰ク其
 承諾ヲシテ充分ナラサラシメハ一二最大ノ重
 罪犯ニ對シ時トシテ死刑ノ廢止ヲ保ツ能ハサ
 ルト有ルハト

右五名ノ委員中已ニ斯ノ異說アルヲ以テ他ノ
 委員ハ下件ニ就テ尚死刑ヲ保存スヘシト為セ
 リ

第一 國王ニ對スル及逆ニシテ後未定限ノ状
 況ニ於ル者

第二 謀殺ノ第一等ニ屬スル者即チ

甲 豫メ惡意ヲ抱テ為シタル殺害ニシテ陪

審裁判此惡意ノ見然タルヲ事實上ニ徵定セシモノ

〔乙〕

謀殺、放火、強姦、襲賊、強賊、海賊、等ヲ行フニ際シ或ハ之ヲ行ハントスルニ臨ンテ人ヲ死ニ至ラセムルモノ

其謀殺犯罪ニ関スル説ニ曰ク

勞一 直接ノ目的ヲ以テ企圖シタル諸種ノ謀

殺ハ仍ホ之ニ死刑ヲ用フヘシ但シ斯ノ

如キ者ハ陪審其事實ヲ証明スルヲ要ス

勞二 謀殺、放火、強姦、襲賊、海賊等ノ重罪一二ヲ

犯スニ方リ或ハ其犯後脱凶セシト欲ス

ルニ際シ若クハ其犯ノ準備中ニ係ル各

個ノ故殺モ亦之ニ死刑ヲ存スヘシ

勞三

前項ノ外諸種ノ故殺罪ニ於テハ裁判官其專斷ヲ以テ終身或ハ七年以上ノ徒刑

ヲ以テ之ヲ罰スヘシ

此他殺兇ノ刑ヲ寛宥ナラレノ及ヒ斬首ノ公觀

ヲ廢セコトヲ申請セリ

是等ノ説ニ拠テ設立スル所ノ草案中ニハ國事

犯ノ罪例ヲ載セス又此亞米利加州ノ立法ニ依

ヒ謀殺ヲ二等ニ分テ唯其一等ニ於ルモノ(即チ

上條委員ノ立説ノ如ク)及ヒ警察吏若クハ勸解

吏ノ職務ニ肢事スルヲ殺ス者ハ之ヲ死刑ト為

セシカ千八百六十六年五月二日上院ノ集議ニ

於テ之ヲ是トスル者三十八名非トスル者三十

九人ナリシヲ以テ遂ニ排斥セラレテ千八百

六十七年ニ編輯セシ草案ハ所シク之ヲ改良セ
エト虽モ後々收用ヲ受ル能ハス

千八百六十八年他ノ律例即チ屍園内ニ於テ斬
首ヲ行フ條例草案ノ議院ニ展示セララル、ヨリ
下院中又建議シテ全ク死刑ヲ廢セシトセリ

然レ氏全年四月二十一日ニ當リ之ニ應同スル
者二十三名應セサル者百二十七名ナルヲ以テ
遂ニ排存セラレ但屍園内ニ於テ斬首ヲ行フハ
之ヲ可ナリトセリ

今英國ニ於テ死刑ノ保存ニ抗スル議論ヲ列叙
シ又貴族リユセル氏ノ新語ヲ此ニ附セシトス同
氏ハ前ニ記載セシ如ク千八百四十年ニ在テハ
死刑ノ保ツヘキ丁々辯論セシ人ナリ

千八百六十五年同氏ノ著書英國憲法ノ緒言ニ
曰ク

余ニ於テハ死刑ヲ施行スルヲ以テ國家成典
上ニ疑ヒテ懐キ来ラズ加之本刑ヲ以テ社會
ノ或ル形状上ニ加フレハ其緊用ナル丁モ亦
タ疑ヒナシ然レモ公正及ヒ適度ノ單純ナル
點ヨリ考ヘ出テ我社會上ニ臨視セハ裁判官
成法ヲ執テ撓ムヘカラサル各種場合其酌量
寛恕ヲ行フヘキモ、ト區別スルハ如何ニ困
難ナルハキヤ又タ特赦ヲ用ユヘキヤ否ヤ決
定スル宰相ノ職務ハ如何ニ苦痛及ヒ怨望ニ
係ルモノナルヤ是ノ際タ諸人ハ如何ニ危疑
ノ批判ヲ與エ来ルヤ其一回斬首ヲ着テ喚ビ

與カレタ震慄ハ如何ニ速ク化シテ惻愴ノ情
 ト成ルヤ如何ニ屢不當ノ斬首ノ例有ルヤ總
 テ斬首ヲ行フハ如何ニ無情ノ物ナルヤ予此
 数件ヲ深慮熟考セハ遂ニ死刑ヲ廢シ性命ヲ
 保タシメテ刑事ノ方正ニ損ナキ丁ノ決意ニ
 到着セリ

爰ニ又死刑重罪ニ関スル立法ノ寛宥ニ歸シテ
 ヨリ英國住民ノ繁殖ニ比例シテ該重罪犯ノ増
 加セサル丁ヲ示カント欲ス

然レ氏時ニ依リテハ處刑宣告ニ及ヒタル者ト
 諸犯罪ヲ以テ訴ヲ被リシ者トテ比例シテ其數
 ニ不同ノ甚シキ丁ヲリ政表ニ載セシテ以テ
 証スルニ處刑寛宥ノ設ケ有リシ以後ハ其以前

ニ在テ死刑ニ處シタル重罪ノ處刑宣告ニ及ヒ
 タル者ト其罪犯ニ因テ訴ヲ被リシ者トテ比例
 スルニ其宣告ノ數大ニ羸レリ即チ千八百二十
 六年ヨリ同ク三十五年ニ至リ又千八百五十四
 年ヨリ同ク六十三年ニ至ル二十年間ノ處刑宣
 告ハ其數左ノ如クニシテ前ノ十年間ニ於テハ
 左ノ重罪ヲ以テ尚カ之ヲ死刑ト為セリ

| | | | | |
|----------------------|-----|-----|-----|------|
| 自千八百二十六年 至千八百三十五年 | 二十 | 十六 | 二十五 | 六十二 |
| 自千八百三十五年 至千八百六十二年 | 三十二 | 三十九 | 五十六 | 八十 |
| | 鷄姦 | 強姦 | 放火 | 貨幣鑄造 |

此ノ年月間ニ於ル諸重罪ノ處刑宣告ニ及ヒシ
 平均數ハ百分ノ七十及ヒ百分ノ七十二ニ當ル
 又同年間謀殺ニシテ處刑宣告ニ及ヒタル者百

分、二十三及と百分、三十ニ當レリ
 近世ニ至リ謀殺ニシテ處刑宣告ニ係ル者百分
 ノ二十二爾余ノ各重罪ニ在テハ百分ノ七十八
 ナリトス故ニ謀殺ハ他ノ諸重罪ニ比スルニ無
 罪ニ歸スル者ノ數甚タ多ト
 率^子死刑ノ宣告及ヒ斬首ハ成律上死刑罪ノ減少
 スルニ隨テ共ニ齊シク減少セリ

| | 死刑宣告 | 斬首 |
|---------|--------|-----|
| 千八百二十七年 | 千五百二十六 | 七十 |
| 千八百三十一年 | 千六百〇六 | 五十二 |
| 千八百三十四年 | 四百八十 | 三十四 |
| 千八百三十九年 | 六十六 | 十一 |
| 千八百六十二年 | 二十九 | 十五 |
| 千八百六十五年 | 二十〇 | 八 |

千八百四十年以來死刑ノ宣告ヲ受テ遂ニ死ニ
 行ハレタル者ハ大抵謀殺ニ係ルモノナリ
 左ニ又千八百二十三年ヨリ同ク三十二年ニ至
 リ及ヒ千八百五十三年ヨリ同ク六十四年ニ至
 ル二十年間ノ實數ヲ對記シテ兩々比較スルモ
 ノハ更ニ緊要ノ件ナリトス

(甲) 千八百二十三年ヨリ同ク三十二年ニ至ル毎年平均

死刑宣告總數
 千二百七十九
 斬首總數
 五十六

此内謀殺ニ係ル者十四
 此内謀殺十二
 之ヲ平均スルニ毎年一箇ノ處刑宣告及ヒ斬首
 ハ左ノ人口ニ當ル

諸重罪ノ死刑宣告

一萬〇百二十二

諸重罪ノ斬首

二十二萬九千七百七十七

謀殺ノ死刑宣告

八十六萬三千二百三十四

謀殺ノ斬首

九十九萬六千二百三十四

(乙)

千八百五十三年ヨリ同ク六十二年ニ至ル毎年平均

死刑宣告總數

五十

斬首總數

十一

謀殺ノ死刑宣告

十九

謀殺ノ斬首

十一

之ヲ平均スルニ毎年一箇ノ處刑宣告及ヒ斬罪ハ左ノ人口ニ當ル

諸重罪ノ死刑宣告

三十七萬三千二百二十

諸重罪ノ斬首

百七十一萬四千三百三十四

謀殺ノ死刑宣告

二十七萬九千三百二十二

謀殺ノ斬首

百七十三萬六千九百九十三

七

佛蘭西

死刑ニ係ル立法ノ沿革ニ於テ諸國ニ擢ンテ最モ著名ナルモノハ佛國トス

本邦ノ革命ニ至ル迄ハ死刑ニ處スヘキ罪狀凡リ百十五條アリ而シテ其千七百九十一年ノ刑法ニ於テハ此ノ罪狀ヲ大ニ減殺シテ止テ其三十二科ヲ保存シ殊ニ此ノ三十二罪ニ對スルモ諸様ノ死刑ヲ廢止シテ特リ斬首ノ一途ニ歸セリ其成法ニ曰ク

死罪判決ニ及ヒタル者ハ皆之ヲ斬首ニ處

スベシト

會盟ニ於テ死刑廃止ノ議ヲ建ル^ト六回ニ及ヒ
シカ其建議ノ採用セラル、ヤ唯^ク千七百九十五
年十月二十五日ノ會盟ニ依テ左ノ布達ヲ為セ
シ外他ノ実効ナシ其布達ニ曰ク

全國治平ヲ公布スルノ日ヨリシテ佛蘭西
共和政國ハ一般ニ死刑ヲ廃止スヘシ

然レ氏治平公布ノ日刻ラサルヲ以テ遂ニ此布
達ノ本旨ヲ貫ク^ト能ハス

千七百九十五年十月三日ノ律ニ於テハ死刑ニ
處スヘキ罪状ヲ三十種ニ限り又千八百一年十
二月二十九日ノ成法ニハ後未定限ノ罪域ニ係
ル者ハ之ニ死刑ヲ施行スヘシト為レ以テ公然

ニ右ノ布達ヲ消除セリ

那勃翁帝ノ立法ニ於テハ革命ノ時ヨリ播布シ
タル死刑罪ハ仍ホ之ヲ保存シ千八百十年二月
十二日及ヒ二十日ノ刑法中ニ死刑三十九條ヲ
設定セリ

千八百二十年ノ初際ヨリ佛國ニ於テ死刑ニ對
スル異論ヲ紛起シ其論鋒ノ特ニ銳烈ナルモノ
ハキゾー氏ノ著書中ニ見ル所ナリ而シテ其向フ
所先ツ國事犯ニ在テハ死刑ヲ廃止スヘシト為
シ漸ク前進シテ稍其論域ヲ擴張セリ

然レ氏斯論ノ功用ニ因テ得ル所ノ成果ハ唯^ク千
八百二十四年六月二十五日ノ成法中殺兇罪ノ
其母ニ屬シテ寛宥スヘキ情状ノ存在スルヲ裁

判所ニ於テ確定スル中ハ死刑ニ代フルニ終身
徒場驅役ノ刑ヲ以テスヘシト為シタルニ在ル
ノミ

七月革命後千八百三十年七月ノ大改革ヲ云フ千八百
三十年十月八日民撰議院ニ於テ決定シルイス
ヒリッブ王ニ上書シテ

羈伴ノ刑ヲ以テ死刑ニ代用スヘキ成法ヲ
設立シ而シテ此ノ成法ヲ公布スル迄ハ其間
判決セシ處刑ヲ措ク姑ク実行セカレドヤ
申請セリ

蓋シルイス、ヒリッブ王ハ自ラ死刑ヲ以テ忌嫌ノ
物トナシ此請ヲ聽テ之ヲ施行セント欲スト虽
モ國是未定ノ際猶此ニ不及ヲ以テ千八百三十

二年四月二十八日更ニ成法ヲ頒布シテ其科目
ヲ減殺シタルノミ此ノ成法ニ在テハ貨幣鑄造
諸種ノ放火及ヒ竊盜ノ重状ニ對シテ死刑ヲ廢
シ又左ノ條例ヲ設ケテ死刑判決ノ者ヲ実行ニ
付スルヲ減セリ云ク

單ニ之ヲ考フレハ死刑ニ處スヘキ重罪タ
リト虽モ陪審裁判其寛恕スヘキ情状ヲ認
定セハ死刑ニ代フルニ終身若クハ有期ノ

徒場驅役ヲ以テスヘレト
政表ニ載スル所ヲ觀ルニ千八百三十二年以來
ハ此新律ニ依テ重罪人ノ死刑ヲ免シタル者多
シ若シ仍ホ従前ノ律ヲ墨守セシメハ蓋シ拳ナ
死刑ニ罹リシナラシ

諸重罪ニ對シ處刑寛恕ニ及ビタル百分ノ數ハ
 左ノ如シ但シ成法條例中此寛恕ヲ用フルノ釋
 裁ナシ故ニ其酌情ハ必的トスル所ナクシテ唯
 其現況ニ應シ陪審ノ思量ニ任セシモノナリ
 千八百三十三年 百分ノ五十七
 千八百五十一年 百分ノ六十七
 千八百六十四年 百分ノ八十五
 殊ニ其死刑ニ處セラルヘキ重罪ニ對シテハ
 千八百六十六年 百分ノ九十四
 又或ル重罪即チ殺兇及ヒ放火ノ如キハ寛恕ヲ
 用フルヲ以テ究ヒ定則ト為スニ至レリ故ニ千
 八百三十二年四月二十八日ノ成法及ヒ實際
 上陪審裁判ニ許典セラレタル死刑寛恕ノ權任ニ

ニシテ異論百出シ之カ批駁ヲ起セシハ亦勢ノ
 已ムヲ得ナル所ナリ
 又、キユロニニル氏ノ元老院ニ示セル書中ニ
 ハ千八百六十七年國事新彙第二百十九号(千八
 百三十二年ノ成法ヲ以テ漸次ニ死刑ヲ廢除ス
 ル一大改正ノ基礎ヲ闡ケリト為シ酌量寛恕法
 ノ所益ヲ贅シ殊ニ此ノ決定ヲ陪審ニ付スルヲ
 稱譽セシニ他ノ議官ハ皆之ニ抗シ直ニ其立法
 ヲ以テ有害ナルモノト為セリ時ニ死刑廢除ノ
 主論家タルカスル氏ノ如キモ之ニ應
 レテ曰ク

陪審官其占權ニ拠リ酌量寛恕ヲ術トシ以
 テ刑ヲ漸決スルハ首トシテ罪狀ノ輕重ヲ

尚フニ非ラス其帰着スル所ハ一ニ該身中
死刑、存廢ヲ偏執スル者ノ多少ニ係ルヲ
以テ其審判ハ恰モ白鵠票ノ如クニシテ即
チ父母ヲ殺害セル者モ屢好票ヲ得ル丁有
リ(千八百六十七年道義学及ヒ政理学督学
院雜誌十卷第百三十六葉)

二月革命ノ際ニ於ル死刑ノ議論ハ又其趣ヲ異
ニセリ即チ假政府ハ千八百四十八年二月二十
八日其命令ヲ以テ(前ノ會盟ノ如ク)國事犯ニ對
シテハ原理上死刑ヲ廢止スヘシト定メタリ
其後同年ノ民會ニ於テ假政府ハ斯ク原理上ヨ
リ定メタル死刑廢止ノ説ヲ成法ニ採リ之ヲ擴
充シテ普ク諸重罪ニ及ハシ總テ死刑ヲ廢セン

ト約セリ

然レ氏同年九月十八日ノ會議ニ於テ又此議ヲ
闕キトカ同意二百十六人ニシテ異論四百九十
八人ナルヲ以テ竟ニ之ヲ排斥セリ時ニ死刑ノ
可廢ヲ主張セルヨリマルチ氏ノ如キモ此際ニ
危疑ヲ發シ死刑ノ廢止ニ就テ左ノ演説ヲ為セ
リ

社會ハ沿習ニ成リ全衆ノ依テ賴ル所ナリ
之ニ觸ル、ニハ最モ謹ミ最モ畏レスニハ
テル可ラス億兆ノ生命ナリ權利ナリ所有
物ナリ拳ナ此宏大ナル堂宇ノ中ニ安息ス
ルヲ以テ砂石ノ一斤タモ其時期ヲ俟タス
シテ毒ニ之ヲ拔去ラントセハ倏チ土崩尾

解ヲ致シ遂ニ人類ヲ湮滅スルニ至ラン
 國事及ニ對シテハ前ニ原理上ヨリ定メタル死
 刑廢止ノ論ヲ保存シテ千八百四十八年十一月
 四日ノ憲法第五條ニ之ヲ收用シ而シテ千八百五
 十年六月八日該法施行條例中更ニ追放刑ヲ設
 ケ以テ之ニ代フ
 其後千八百五十三年六月十日ノ成法ヲ以テ皇
 帝及ヒ皇族ヲ衝擊スル者ハ右ノ憲法(第五條)ニ
 依ラスシテ此レ特ニ死刑ヲ保持スヘキモノト
 為ス蓋シ這的ノ重罪ハ國事犯タルヲ得サルヲ
 以テナリ(成法第四十五号ヲ参考スヘシ)而シテ刑
 法第五十七條ニ於テ憲法第五條ノ原旨ヲ改定
 スルヲ左ノ如シ

其目的政府ヲ顛覆セシトスル欽或ハ嗣君
 ノ順次ヲ變セシトシ或ハ帝權ニ抗セシト
 シ或ハ國民ヲ煽動シテ干戈ヲ動サシトス
 ルニ在ル者ハ堅牢ナル密室内ニ之ヲ禁囚
 スヘシ

既ニメ又屢ニ立法集會ニ(此ニ於テハ死刑廢止ノ
 論大ニ稱揚セラル)當ル所ノ申請ハ勇ニ回帝國
 ノ死刑疑問ヲ懲息シ其疑問ハ元老院及ヒ立法
 官ノ論題ニ供スルモノト為レリ
 昂テ元老院ニ於テ之ヲ議スルハ千八百五十四
 年千八百六十四年及ヒ千八百六十七年ニレテ
 其千八百六十七年ニ在テハ連署一萬四千人ノ
 申請ニ因リ全年十二月十九日及ヒ廿四日ノ兩

日其詳備シタル討論ヲ採リ之ヲ本院ノ商議ニ付セリ

就中前ニ記載セシ貴族「テラ、ギエロニール氏」上申ニ於テハ死刑ヲ以テ公正須要ノ物トナシ「ロソフ、モシテスキウ、ベニヤ、ミニコレス」ニト、ゴロク諸氏ノ説ヲ引テ之ヲ証シ且死刑ヲ「エテ漸ク廢除セシメニハ他ニ有益ナル一種」刑類ヲ設ケ又知識風儀ノ教及ヒ宗教ノ他ヲ隆盛ナラシメテ遂ニ斬首ノ数ヲ減少スルニ至テ此ニ着手スヘト云ヘリ
諸説中此ノ上申先ニ議官「グーホート、ゲサンク」トゲルマイン氏ノ所論ヲ以テ特ニ卓絶セルモノト為ス然レモ此時討論ノ結局ハ之ヲ議院ノ

公議ニ譲ル可シト決セリ

立法官ニ於テモ己ニ千八百六十四年五月十六

日ニ當リ適ニ千七百九十六年(無辜ニシテ)

斬首ニ處セラレタル商人「レズルク」ガ家屬ノ

償贖論ニアルニ會シテ漸ク死刑原理ノ講究ニ

涉リ次テ千八百六十五年ニ於ル死刑廢止ノ論

ニ及ヒシカ之ヲ可トスル者二十四人ニシテ否

トスル者百九十五人ナルヲ以テ遂ニ其論ヲ存

ケラル

佛人「キエジウ」氏カ英國ノ佛情搜查委員「答ル

書ニ拠レハ佛國一般ノ公論ハ死刑ヲ廢止スル

ヲ以テ不可ナリト為スニ似タリ而シテ死刑ノ廢

止論ニ就テ有名ナル囚獄督理官「ハロ」氏モ亦

謂ル丁アリ

佛國ノ論者常ニ以為ラク死刑ノ廢止ヲ主
張スル輩ハ歐洲各國ニ於テ唯々空論家アル
ノト然ルニ論者若シ本邦諸大家ノ廢止
止論ニ左袒スル者多キヲ見レハ大ニ驚異
スル所ヲラシ

今佛國中死刑ノ疑問ニ係ル事歴沿革ヲ馮出ス
ルノ後又其施行法ヲ爰ニ掲ケントス即チ其罪
科ハ左ノ如シ

第一 反逆

第二 國王若クハ王屬ノ性命及ヒ身体ニ係ル

衝擊

第三 兵器ヲ執リタル一揆其他國安ヲ亂ル重

罪

第四 警察吏勸吏工對スル横暴及ヒ毀傷

第五 謀殺

第六 殺父母

第七 殺兒

第八 毒殺

第九 或ル重罪ヲ犯スニ際シ殘虐ノ所業ヲ為

ス者

第十 他ノ重罪ヲ犯スニ前チ或ハ之ヲ犯スニ

際チテ熟囚セシ殺害

第十一 人ノ罪凡チ斬リ其人ヲシテ十日内ニ死

セシムル者

第十二 謂レ無ク人ヲ幽囚シテ殘虐ヲ加フル者

第十三 偽証ヲ作り以テ死刑判決ニ至ラレムル者

第十四 住屋又ハ建築ニ放火シ或ハ之ヲ打碎シ以テ人死ヲ致ス者

此他第ニ條第五十九條ニ於テハ既行未成及ヒ重罪共犯ハ其刑ヲ本罪ト同ウシ又六十一條ニハ強盜及ヒ一揆ニ係ル犯後ノ加功六十一條ニハ總テ竊盜物ヲ扶持匿藏スル者、皆、其各本罪ヲ以テ論スヘキモノトス加之五十六條ニ於テハ(千八百三十二年四月二十八日ノ成法ニ依テ改定シタル新律中)終身徒刑ニ處セラレタル者本刑ニ就クノ際重テ同刑ニ處セラレハキ重罪ヲ犯ス片ハ之ヲ死刑ニ擬ス可レトス

雖然既ニ前ニ記載セシカ如ク若シ陪審裁判ノ酌量寛恕スヘキ情状ヲ查出スル内ハ死刑ヲ用ヒスシテ終身又ハ有期ノ徒刑ニ處ス(第四百六十三條(千八百三十三年及ヒ千八百六十三年改定律第四十号ヲ参考スヘシ))
又第六十七條ニ拠ルニ十六年以下ノ者ハ之ニ死刑ヲ科セス

本邦ニ於テハ死刑ノ新法ヲ君主ニ取ラス然レ氏千八百三十年九月廿七日ノ布達ニ拠レハ死刑宣告ニ及ヒタル者ヲ行刑スルノ前ニ際リ裁判書類及ヒ持赦ヲ行フノ素由ト為リ得ヘキ情状ヲ具シテ之ヲ司法長官ニ進呈スヘシト為シ死刑ヲ行フニ當テハ之ヲ公衆ニ示シ其器ハ落

符ヲ用フ佛國中死刑ニ處スヘキ重罪及ヒ其處
 決并ニ斬首ノ數ヲ時ニ千八百三十二年四月二
 十八日ノ立法ニ着目セシ政表比較左ノ如シ
 謀殺、殺父母、殺兒、毒殺、放火ヲ以テ訴ヘ被レ及ヒ
 刑ニ処セラルル者ノ毎年平均數

勞一 被訴

(甲) 千八百三十八年ヨリ同ク三十二年ニ至ル 四百〇三

(乙) 千八百六十年ヨリ同ク六十四年ニ至ル 五百六十五

勞二 死刑或ハ羈伴刑ノ宣告

(甲) 千八百三十八年ヨリ同ク三十二年ニ至ル 二百四十七

(乙) 千八百六十年ヨリ同ク六十四年ニ至ル 四百七十一

被訴ノ罪科

謀殺 自千八百三十八年 百九十一

殺兒 自千八百三十八年 百七十三

毒殺 自千八百三十八年 八十七

殺父母ノ數ハ右ノ最後年間ニ尚ホ三個ヲ増シ放

火モ亦著レク其數ヲ加ヘリ

一千八百六十五年ヨリ同ク六十六年ニ至ル被
 訴ノ數左ノ如シ

千八百六十五年 千八百六十六年

謀殺 百七十四 百九十一

故殺 百二十八 百十五

殺父母 十三 六

殺児

百九十六

二百〇一

毒殺

十八

二十六

放火

百八十一

百八十八

死刑宣告及ヒ死刑実行ノ数左ノ如シ

死刑宣告

斬首

千八百二十五年

百三十四

百十一

千八百二十六年

百五十

百十一

千八百二十八年

百十四

七十五

千八百三十年

九十二

三十三

千八百三十一年

百〇八

二十五

千八百三十三年

五十

三十四

千八百三十四年

七十五

三十四

千八百六十一年ヨリ同ク六十六年ニ至ル六年ノ間

死刑宣告

斬首

千八百六十一年

二十六

十二

千八百六十二年

三十九

二十五

千八百六十三年

二十

十一

千八百六十四年

九

五

千八百六十五年

十四

十

千八百六十六年

二十

九

合計

百二十八

七十二

右ノ六年間死刑宣告ノ者百二十八個ニシテ謀

殺八十九竊盜及ヒ強賊ヲ遂ニ為メノ故殺十三

殺父母十一毒殺五殺児五放火五而メ男百十六

人女十二人具中文筆ヲ能ヒサル者五十人アリ

政表ニ拠レハ佛國ニ於テモ死刑ハ唯々之ヲ謀殺

= 実行し其他ニ在ラハ死刑宣告ニ及ヒレ者ト
 虫モ之ヲ実行スル了甚々稀レナリテハト一ラ
 ン氏曰ク此際ニ於テ陪審ハ死刑ニ處セラルヘ
 キ犯人ノ為メニ酌量輕減スヘキ所アリト発言
 スルヲ常習トス而メ事實ノ上ニハ却テ一モ酌
 量スヘキ情状ノ存在セサル了有リ殊ニ又特赦
 ニ容ル可ラサル者モ或ハ之ヲ省メテ前ノ如ク
 為セリト

故ヲ以テ同著述者モ亦凡ソ謀殺ノ性質ヲ具セ
 サルモノニ對シテハ一切死刑ヲ廢止スルヲ司
 法實際ノ有益ト認メタリ

獨逸刑法草案
辨由附錄

死刑論

沿革誌

第四

自十八和蘭
部至結尾

八 和蘭

王國和蘭ニ於テハ目今仍ホ佛国刑法ヲ施行ス
 千八百六十三年全独乙
 刑法新報ニ詳カナリ然レモ一千八百五十四
 年六月二十九日ノ成法ヲ以テ其内数箇重罪ニ
 對シテハ死刑ヲ廢止セリ即チ未婚ノ女初度ノ
 殺兒(コイデヤナール茅三百二条)又ハ或ル重罪
 ヲ犯スノ際ヲ通ニ為シタル故殺ニシテ犯者豫
 ノ期スル所口ノ本重罪ト相ニ連接セザルモノ
 (コイデヤナール茅三百四条)及ヒ放火ノ故ヲニ
 燒死ヲ期セザル場合等是ナリ
 一千八百十一年ヨリ今ク六十一年迄和蘭全部
 ニ於ル死刑宣告總計四百三十箇有リ而シテ遂ニ
 本刑ニ行ワレタルモノハ其内唯百〇二人ナリ

其罪科及ニ比較數ノ如キハ即チ左ノ如シ

罪名 死刑宣告數 日處行數

兵器ヲ携帶セシ一揆一

殺見 四十五 三

故殺 三十 十四

謀殺 百十一 四十九

殺父 七 三

毒殺 二十四 十三

放火 九十四 三

強賊 九十九 十六

千八百六十二年 中死刑宣告ニ及ヒタル者九人
日ク六十三年中 十三人 有リトイヘニ概スルニ
千八百六十一年 未全和蘭國中 遂ニ死ニ行リレ

タル者ナシ 註日加之項口聞ク月日 政府死刑處
セシニ日官モ亦タ之 作リ之レヲ 議官ニ表示
レニ日意セリト云フ

九 白角義

白角義ニ於テハ一千八百六十七年迄 仏國刑法

ヲ墨守セリ 故ニ死刑ニ及スヘキ重罪ト為スモ

ノ亦タ彼レト殊ナルヲ無カリタリ

然レニ其實際ニ至テハ西國互ニ齊シキヲ能ワ

ズ 即チ白角義ニ於テハ遂ニ斬首ニ及ヒタル數

ヲ凡ソ死刑宣告ニ及ヒタル數ト相比例スルニ

佛國ノ多キニ及バザルヲ常ニ廻カニ甚ダシ

加之該國ニ於テハ千八百二十九年十一月ヨリ

千八百三十五年十一月迄 特赦ヲ以テ常ト為シ

一モ死刑ヲ行ヒシヲナシ

於是乎漸ク民選議院中議論生シ特赦ノ権多ク失スルトト為スニ會シ因テ復タ更ニ死刑ヲ施行セリ

一千八百三十一年ヨリ同ク六十五年迄死刑宣告總計八百四十九人有リシガ内只タ五十七人死ニ行ケタリ其罪科ハ即チ

謀殺実親 三人
毒殺 三人

謀殺 二十一人
竊盜ニシテ謀殺 二十五人

竊盜ニシテ故殺 三人
放火一等種類 二人

今是レヲ觀テ以テ爰ニ掲載スルモノ、外尚ホ

刑法昏中死刑ニ擬スル数多ノ罪科ヲ犯セシ者ハ總テ皆チ斬首ニ及バザリシヲ自ラ明カナリ近年ニ於テ死刑宣告ノ数ヲ同ク知行ノ数ト相比較スルニ即チ左ノ如シ

| 年数 | 死刑宣告 | 日施行 |
|---------|------|-----|
| 千八百六十一年 | 三十二 | 三 |
| 千八百六十二年 | 十九 | 一 |
| 千八百六十三年 | 十三 | 一 |
| 千八百六十四年 | 二十 | 〇 |
| 千八百六十五年 | 十 | 〇 |

向爾義ニ於テ死刑廢存ノ疑問ハ立法官中自般討論ノ物ト为リタリシガ一千八百六十七年六月八日施行セシ新刑法昏商談ノ時ニ際シ殊ニ

該論深ク細微ニ涉リタリ
 時ニ先ツ司法卿主トシテ死刑ヲ以テ廢止スベ
 キモノト為シ上下兩院ニ對シ數多辨解ノ原由
 中殊ニ政表ノ報スル所口ヲ以テ白南義王国ニ
 於テ某年間中或ハ某縣中死刑ヲ行ワザリシカ
 モ其間ヲ見ニ重罪増加セザリシヲ証據トシ
 断然之レヲ廢止セント主張セリ
 然レモ立法會負中司法卿ノ説ニ雷同スルモノ
 無ク加之上院ハ司法卿ノ問ニ死刑ヲ保存スベ
 キ理有リヤノ声ニ応シテ然リ之レ有リト答ヘ
 シ者三十三人而ノ其之レ無シト応セシ者只十
 五人タリ下院モ亦タ死刑廢止論ヲ是トスル者
 四十三人ニシテ之レヲ非トスル者五十五人此
 ヲ以テ遂ニ之議排斥サレタリ

「ハウ」氏ハ當時新刑法會編輯ノ主任ヲ負ヒ且
 ツ本来死刑廢止論家ナルガ今議院ノ決定ニ心
 ヲ寄セテ以為ラク目今尚ホ全国人民死刑ヲ以
 テ社會呵護ノ一要具ト為シ今マ民選議院ヲシ
 テ明クニ之ノ意ヲ表セシムルモノナラント
 因テ又タ認メテ以為ラク故ニ今者若シ陪審ニ
 向テ死刑ハ廢スベキヤ將タ保ツベキヤト問フ
 彼モ亦タ蓋シ答ヘテ曰ハレ項者民選議院ノ
 立説ニ同意ナリト然レモ「ハウ」氏獨リ自ラ期シテ
 謂フ久シク特赦ヲ行フテ止マザレハ死刑ヲ廢
 止シ得ベキノ徵漸ク周フシテ遂ニ其信ヲ立ツ
 ルニ足ラント

方今自南義ニ於テ死刑ニ処スルノ罪科タル千八百六十七年六月八日ノ刑法昏ニ擬ルニ即チ

左ノ如シ但シ該國死刑ハ公然衆ニ秘セス註曰刑法草案中ニ於テハ斬首ハ四面閉塞内ニ於テスベシト為シタリ然レモ其斬首ヲ行フノ際テ之ノ核証者ハ必ず官吏ニ由ルトスルヲ以テテリコセ止都註上等裁判所之ヲ不可トシ遂ニ此該處塞サレテ僕

第一國王ノ性命及ヒ身體ニ係ル歐擊

第二太子ノ性命ヲ害セントスル歐擊

第三謀殺

第四正系ノ父母又タハ陰父母及ヒ正系ノ尊親

殺害

第五毒殺

多少ノ遲速有リトイハ凡竟ニ死ニ至ラシムハキ飲食ヲ用ヒテ殺セシモノ但シ其飲食供給調理如何ヲ論セス

第六竊盜強奪及ヒ他人ノ所有物ヲ暴碎スルニ際シ又タハ之レヲ為スベキ準備中ニ係ル

殺害

第七凡ソ世ノ危険ニ係ル諸重罪ヲ犯シ為メニ人死ヲ致セシモノ而シテ該犯罪者亦タ人命危険ニ係ルヲ熟知スル場合則チ放火機関

破烈。鉄道損毀。鑛場浸水。

同刑法昏七十七條ニ擬ルニ十八年以下ノ者及ヒ其七十九條ノ如キ寛恕スベキ情状ノ判然者

明ナルニ於テハ之レヲ死刑ニ処セズ但シ是ノ酌量ノ如キハ一千八百六十七年十月八日ノ律

ニ、從ヒ他國、如ク陪審ノ決定ニ非スシテ之レ
ヲ裁判官ノ權トス

十 伊多利亞

王国伊多利亞ニ於テハ(トスカナ)地方ヲ除クノ
外)千八百五十九年十一月二十日ノ刑法昏ニ基
ヅキ死刑罪科ヲ十三種ト為セリ然レモ陪審裁
判所ニ於テ其寬恕スベキ情状ヲ確定スルニ於
テハ本刑ヲ赦免スルトス

一千八百六十五年全伊多利亞王国中普通刑法設
立ノ議ニ會シ議院中或ハ死刑廢止スベキノ論
有リ時ニ下院ニ於テハ廢止ヲ拒ム者九十一人
之レヲ曼トスル者百五十人ニシテ終ニ海陸軍
律及ヒ街上強賊ヲ除クノ外死刑廢止ヲ一決セ

然レモ此議同年四月二十二日上院ニ於テ同意
十六名ニ及シ之レヲ非トスル者八十七人ニシ
テ遂ニ復タ排斥サレタリ

近年伊多利亞国刑法草案改定ヲ以テ命セラレ
タル委員千八百六十八年五月十八日ノ草案中ニ
於テ死刑ヲ廢止シ之レニ代フルニ終身孤島懲
役場へ放置シ而メ該所ニ於テ嚴ニ其居所ヲ分
テ各々之レヲ一室内ニ幽シテ以テ其徒役ニ服
事セシメントセリ

千八百六十六年ニ於テハ死刑宣告ニ及ヒタル
者六十人ナリシガ其内一モ死ニ行ワレタル者
ナシ

千八百六十七年刑法新誌才ニ自七十七葉
ニ詳ハナリク時ニ同レルモノノ代議人嘆嗟

シテ曰ク吻リニ寛典ヲ用ユルハ恰モ更ニ重罪ヲ誘導スルニ由シト

死刑ヲ行フハ公然衆ニ秘セス其方ノ如キハ諸州中一樣ナラズ或ハ斬或ハ絞

前キノ大公国トスカナレニ於テハ已ニ記載セシ如ク大公国レヲツホルト千七百六十五年以來死刑

判決ニ及ヒタル者総テ挙テ特赦ニ行ヒシ後テ遂ニ一千七百八十六年十一月三十日制令ヲ出

シ本刑ヲ廢止セリ即チ其制令ニ曰ク
粵ニ朕満足當テラザルモノ有リ夫レ知刑寛

恕ヲ行フテ傍ラ重罪ヲ未萌ニ禦キ勉メテ裁判落着ヲ速カナラシメ真ノ重罪犯者ニ對シ

テハ死刑ヲ用ユルヲ急且必ニシテ竟ニ犯罪ノ數ヲ増加ニ至ラシメテ却テ通常犯罪ノ數

著シク減少シ其最モ重大ナルモノニ至テハ極メテ減却シ殆ント古今聞カザルノ甚シキ

ニ至ラシメタリ故ニ朕決意シテ速カニ刑法ヲ改革シ責臺及ヒ死刑ヲ断然廢棄セシ是レ

我社會前進ノ目的ヲ達セシムル良番ト為スベカラザレハナリ

然レ此茲ニ決定セシ死刑廢止タル久シク履行スル能ワズ已ニ千七百九十年ニ至リ回事及ニ

對シテハ復テ死刑ヲ用ユルヲトシ又テ千七百九十五年ニ於テハ爾余一ニノ重罪モ亦テ死刑

ト為セリ即チ謀殺ノ如キ是ナリ又テ該國他國所轄ニ歸セシヨリ乃チ他國刑法ヲ用ヒ從テ死

刑ノ條例モ亦テ煩冗ニ涉リ該地人民ハ已ニ行

トスルナニ於テ死刑廢止ノ厥初ニ係ル政表新
報ハ死刑廢止ノ不可ナルヲ徴ストイハルニ
八百六十五年司法卿「パール」氏ハ謀殺ノ増加ヲ
以テ他ニ弁解スベキ原由有リト為セリ

十一 伊亞波仁亞

伊亞波仁亞國ニ於テハ千八百四十八年ノ刑法
昏ニ扱ルニ死刑ト為スノ重罪尚ハ数多有り諸
種叛逆及ヒ海賊諸般ノ殺害及ヒ畢九切斷
死刑ハ絞罪ニシテ之レヲ公衆ニ於テス

千八百六十年三十五個死刑宣告有リシガ其内
行刑ニ及ヒタル者ハ二十三人タリ

十二 蒲萄牙

千八百四十六年以來蒲萄牙ニ於テハ一モ先
刑ニ行ワレタル者ナシ註曰十七百七十七年未
シテ死刑ニ行ワレタル者ナシト云フ

千八百六十七年七月來施行セシ新刑法昏ヲ以
テ斷然死刑ヲ廢止シ而メ之レニ充ツルニ終身
徒役ノ刑ヲ設ケタリ

千八百五十一年ヨリ曰ク六十年迄十年間刑事
表記ニ憑ルニ又シク斬罪ヲ措クトイハル猶ホ

却テ死刑罪中尤モ著大ナル重罪殺害ノ數常ニ
減少セリ千八百五十一年ニ於テハ二百七十八

人重罪者有リシガ千八百六十年ニ於テハ唯百
四十二人タリ

十三 デ子マルク

噠國千八百六十六年二月十日ノ刑法昏ニ扱ル

死刑ハ公衆ニ於テシ其器ハ行ヲ用ユルト
 而メ本刑ニ処スベキ罪科太夕数多ナリ仮令
 ハ叛逆国賊故殺有他諸種重罪ノ或ハ人死ヲ致
 スモノ即チ海賊放火或ハ故ヲ破船ヲ為サシ
 メ又々ハ浸水ヲ企ツル等是ナリ註曰叛逆ナル
 第七十一條ニ據ルニ凡ソ連國全部或ハ其一部
 割テ他國ニ支配ニ脱セシメント同リ同テ
 殺イテ國王ノ支配ニ他國ト連合スルモ其
 殺罪皆ナク罪其第八十條ニ立テテ日ク凡ソ
 殺シ又々ハ國王ノ家ノ自立ヲ害フ者ハ其罪
 第一八十八條ニ成法ニ倣ヒ之レテ殺スル者
 ハ一般列國ノ日凡ソ故上ニ終身間ノ懲殺ス
 百八十六條ニ其刑八年以上終身間ノ懲殺ス
 ヲ故殺ト云其刑八年以上終身間ノ懲殺ス
 又々情状ノ特ニ重キニ於テハ其刑死罪ナ
 九十九條ニ日ク思熟四ニシテ他人ヲ殺ス
 殺ト云フ其罪死

然レ死刑ハ敢テ酌量ヲ用エベカラズト為ス

非ス諸種場合ニ於テ情状ノ度ニ隨ヒ寛典ニ
 処シ得ルノ権裁判官ノ有スル所タリ

千八百四十八年ヨリ日ク六十三年迄全時間中
 噠国ニ於テ死刑宣告二百五十個有リヒガ其内
 遂ニ死ニ行ワレタル者僅ニ十七人ノミ

十四 瑞典

瑞典国ニ於ル立法ノ沿革ヲ追窮搜索スルハ死
 刑ノ疑問ヲ弁明スル為メ特ニ緊要ナル事許ト
 ス

日国往時ノ立法ハ死刑ヲ施スノ區域頗ル宏大
 ニシテ其一千七百三十四年ノ刑法看ニ於テハ
 死刑ニ処スルノ罪科六十八箇有タリ然ルニ其
 内十數罪時ノ經過ニ從テ往々廢止セラレタリ

即チ千七百七十九年千八百二十三年千八百三十
十五年千八百四十九年千八百五十五年千八百
五十八年及ヒ千八百六十一年是ナリ

夫レ死刑廢止論ハ各國競ニ唱フル所ニシテ當
時瑞國ニ於テモ亦タ論理上ヨリ生シタル廢止
論盛ニシテ茲ニ魁首タル者ハ即チ太子ヨス

カルタリ日氏一千八百四十年一昏ヲ著シ題シ
テ死刑及ヒ檻獄論ト云フ之レヲ世ニ公シテ以
テ普ク其所見ヲ太方ニ明カセリ

太子祚踐ノ后チ猶ホ断然成法上ノ死刑ヲ削除
セズトイヘ氏是ヨリ死刑宣告ニ當リタル者遂
ニ死ニ行ワレタルノ數著シク減少セシモノハ

王常ニ勉メテ特赦ヲ用ヒシニ由ル
王曾テ太子タルノ日前キノ死刑及ヒ檻獄論中
ニ述ベテ曰ク

夫レ特赦ノ權ハ寛容神妙ノ思念ヨリ生スル
モノニシテ追究ニ罹リタル枉寃ノ為メ最後

一逋逃ノ処ヲ容スモノ唯是レ之レ有ルノミ
加之文字ノ其意ヲ達スル能ワザル場合ニ臨

ニ獨リ之レヲ以テ成法ノ旨ヲ遂ゲシムベキ
モノトス又タ成法ハ方正ヲ伸張セシムル權

喪ナキ死具ニシテ思慮ノ感動ヲ備ヘズ唯特
赦ハ社會ノ安穩ヲ裁節スルノ深思察見ニシ
テ本心ノ不忍ヨリ生シタルモノナリ
一言ニシテ生殺ヲ確定シ以テ之レヲ必行セ
シムルノ言ヲ宣ハルハ豈ニ恐懼セサル可ケ

ニヤ亦タ心ス其責メヲ任スルヲ要ス先ツ意
決ヲ為ス臨ミ好ク中正ヲ得ント欲セバ心
志为メニ動搖シ恐レテ安着スル能ワズ漸ク
測陰ノ情生シテ以テ終ニ心上ニ盤延ス独リ
裁判官ハ是痛実不安ノ情ヲ以テ掣肘セラレ
ガル所以ハ凡ソ此職務ニ當リタル者ハ唯此
然成法ニ準拠シ其當ヲ察シテ顧慮牽引ナク
之レヲ施行スベキ者ナレバナリ
去リトテハ特赦ノ區域モ亦タ甚其狹隘ナル
ニ非ス今マ夫レ是區域ノ廣延及ヒ酌量輕減
ヲ施行シ得ヘキ境界線ノ巨ル所口ヲ問フニ
ニ其レ爲ニカ在ル
曰ク言ヒ難キ也是レ時ト死刑ヲ廢シテ蓋シ

国安ニ補益有リトスルノ目的ニ関シテ或ハ
存シキヲ能ワス

諸人其レ假リニ身ヲ君主ノ地位ニ進メテ以
テ思ヘ方今瑞典國毎歳平均シテ生殺ノ疑問
ニ繫ル者猶ホ六十一人有り而メ其所決ノ如
キハ通常行政ト同視スベカラサルヲ以テ君

主ノ時ヲ要スルヲ亦タ許多云々
前ニ記載セシ
著者トリスコ
氏ノ翻譯有リ千八百四十一年
版才十三葉中死刑ノ部ヲ参考スベシ

立法ハ漸ク千八百六十一年ニ至テ改正セリ即
チ日年一月二十九日ノ成法ヲ以テ謀殺トイヘ
死酌量寛恕ヲ為スベキ情狀見ワルニ於テハ
死刑ニ代フルニ終身懲役ニ科スルノ權裁判官
有スル所口ト為セリ

一千八百六十六年廢止セシ四民等次中(僧侶貴族町人農民)農民ニ對シテハ已ニ千八百六十三年死刑廢止ヲ公布セリ然レ尺千八百六十四年二月十六日頒布セシ刑法各ニ於テハ更ニ二十三條ヲ掲ケテ以テ總テ左ノ諸重罪ニハ死刑ヲ保存スルトト為セリ即チ
叛逆國王ノ身體ニ對スル暴橫。謀殺。毒殺。強盜。但シ其被侵女死スルカ又タハ是ノ事ヲ遂ニ為メ豫メ魔業ヲ用ヒシ場合。或ハ放火ヲ為シ人命ヲ損スルモノ。及ヒ人ノ居住スルヲ硯知テ故ヲニ之レヲ放ツモノ。強盜ヲ為スニ際シ人ヲ殺害スルモノ。自余已ニ終身懲役ニ処セラレタル者ニシテ又タ故殺ヲ為セシ場合

右ノ内唯最后ノ犯罪ノミ牽連ナク單ニ成法ニ処スルトトス(談件トイヘ尺亦タ只寛恕スベキ情状ノ有ラザルモノト視做シテ然ルノミ爾他ノ場合ニ於テハ死刑ヲ必定トセズ其刑法條例ノ要旨タル唯ニ犯罪者ノ所為死刑ヲ要スルモノカ將タ終身懲役ニ止ルベキカヲ明察スルニ在リトス
該國ニ於テ死刑宣告ヲ減殺シ且ツ己ニ宣告ニ及ヒタル者モ亦タ更ニ其尺行ヲ減縮セシヨリ著大ナル重罪ノ數増加セズ却テ漸ク大ヒニ減少セシト云フ
惣テ輒近十年來死刑ニ行ワレタル者ハ唯謀殺ノミニ係ル

一千八百六十七年：於テハ一モ斬罪ナシ
 今爰：際シ尚ホ着目スベキモノ有リ即チ千八
 百六十七年ノ初際ニ於テハ新憲法ニ基ツキ更
 ニ設立セシ民選議院中死刑論ニ及ヒシ其之
 レヲ廢止スベシト揚声スル者百三十人又之
 シヲ保存スベシト為ス者五十三人又上院ニ
 於テハ之レヲ保存スヘシト為ス者三十九人廢
 止スベシト為ス者三十八人又リシガ翌千八百
 六十八年二月二十九日：於テハ同民選議院殊
 ニ去年議シタル同議負ナルガ死刑廢止ヲ是ト
 スル者六十九人ニシテ之レヲ非トスル者百人
 タリ唯々上院ハ前キノ決議ヲ變ゼズシテ本年
 三月一日ノ議後々死刑保存ニ決着セリ

又本年民選議院ニ於テ十時間討論ノ内其演說
 員中終ニ三十七人ハ之レヲ保ツベシト為シ三
 十五人ハ之レヲ廢スベシト為セリ該院中意見
 ノ變換斯ノ如ク其常ナキ者其原由ノ係ル処
 之レヲ詳カニスル能ハストイヘ反疑クハ當時
 政府ノ持論タル僅カ三年前ニ於テ設立セシ刑
 法書ヲ以テ如今已ニ改定シ大ニ其面目ヲ變
 セントスルハ亦タ危疑スベキモノナリトシテ
 以テ深ク該院中ノ決定ニ響映ヲ投セシモノナ
 ラシ
 然リテゴロリ氏ハ旧制度持張家ナルガ猶ホ
 自ラ稱シテ死刑ノ敵ト為シ以テ之ヲ死刑ノ有
 無ハ瑞典國中決テ行政上ニ係ルノ事件ト為ス

下カラズト

十五 魯西亜

魯国ニ於テハ女帝「エリサベツト」千七百六十
 四年九月三十日ノ布達ヲ以テ死刑ヲ廢止セリ
 然レモ本律ノ及テ所ロハ唯尋常裁判ノミニシ
 テ著大ナル國事叛ニシテ上等裁判所ノ吟味ニ
 係ル者ノ如キハ是ノ限ニ非ス故ニ帝ノ後嗣
 御ノ間屢ニ死刑ヲ用ヒタリ
 又之レニ及シテ「アレキサンデル」第一世帝ハ謀
 殺ニシテ死刑宣告ニ及ヒタル者モ之レヲ死刑
 シテ以テ死ニ行ワシメシ「無シ其千八百十六
 年四月二十一日ノ布達ニ曰ク朕常ニ謂ラク凡
 ソ重罪ヲ犯ス者社會ノ安全國家ノ平定君位ノ

堅固ヲ害セザル以上ハ已ニ死刑宣告ニ及ヒタ
 ルモ之レヲ先裁セサルヲ以テ倫理ノ公務ト為
 スト

千八百四十五年ノ刑法中死刑ト為スモノハ

唯ニ皇帝及ヒ國家ニ叛スル重罪（五種アリ）及ヒ

疫病検査法傳染病流行ノ地方ヨリ來着セシ者
其健否検査四十日間外出ヲ禁スル

法ニ及ク者（三種アリ）トセリ然レモ重罪断決ノ

或ル場合ヌタハ皇帝ノ命ニ依リ尋常裁判ヨリ

變シテ非常裁判（即チ軍事裁判）所断ニ移ス有

リ斯ニ至テハ刑法中ノ法則ニ憑ラズ故ニ尋常

裁判官視テ以テ之レヲ死刑ト為サズトイハレ

取テ之レヲ死ニ知スル「有リ」註曰「仮令ハ往キ

ル「グ」ニ於テ屢ニ放火者有リ一「斐」月ノ間ニシテ
 二十三人ヲ射殺セリ

千八百六十四年ノ裁判改革ニ於リ是特異裁判ヲ廢シテ以テ軍事裁判ハ唯軍人ノミニ限ルト為ヒリ

大抵死刑ニ代フルニ「ジビリエニ」追放モテ以テ爰ニ苦役ニ服セシムルトス

十六 北亞米利加共和國

北亞米利加中死刑ヲ廢止セシ國ハ「ミンガレ」千八百四十六年来止ニ「ガニ」官報ニ於テ「ル」却テ「成」少セ

然レハ諸罪人ノ「ロ」テイスラ「ド」千八百五十二年來及「ビ」スコ「ジ」ロ「千八百五十二年來」

註ニ曰ク「ビ」スコ「ジ」ロニ於テハ從來唯謀殺ニリ適々本刑ヲ用ヒシガ今ハ全ク之レヲ廢止セリ有リ蓋シ之レ「直」新裁判「刑」名「宣」告モ「ラ」ヲ以テ皆

他ノ諸國ニ於テ死刑ト為スモノ太抵唯謀殺ノ

ミトス他ノ重罪ヲ以テ死刑ト為スハ甚タ稀レ

ナリ即チ唯々「ニ」ウヨルク「及」コ「ラ」イ「ラ」ニ於テ叛

逆「マ」イ「子」ニ於テ放火ノ如キ是ナリ

凡ソ謀殺ト名ツクルモノ、了鮮ハ太抵英國刑

法各ニ於ル「ウ」クモ各箇著大ナル諸國假令ニウ

ヨルク、ライ「ラ」、ペ「ン」ジ「ル」バ「ニ」エ「ン」、マ「ッ」サ「シ」エ「ッ」ツ「ク」及

ヒ「マ」イ「子」ノ如キ是ナリ

但シ謀殺ヲ分テ二種ト為ス而ノ其一等ニ屬ス

ルモノ、ニ死刑トス

是一等謀殺タル假令ハ「マ」ッ「サ」シ「エ」ゼ「ッ」ツ「ク」ニ於テ千八

百五十八年ノ成法中定解スル如シ即チ

豫メ反覆熟因シ其目逐ヲ履ンデ以テ成シタ

ル謀殺或ハ死刑若クハ終身徒刑ニ処セラル
ベキ程ノ重罪着手カ或ハ其試ニ中ニ於テ為
セル謀殺其他又タ特ニ残忍暴悪ヲ極メタル
謀殺之レヲ謀殺ノ一等種類ト云

謀殺ノ一等種類ヌクハ二等種類ニ属スベキ
ヲ決定スルハ陪審ノ任トス

其一等種類トシ判決サレタルモノハ即チ必
死刑ニ科セラルベキトス

独リアラバマ^ル国^ニ於テノニ豫^メノ
陪審ニ準許シテ或ハ一等謀殺ヲ以テ判定サレ

タル者トイヘ^ル尚ホ減^シジテ之レヲ終身禁錮
又タハ終身懲役ニ科セシムベキ権ヲ以テセリ

「マイ子」国ニ於テハ一千八百三十七年成法ヲ設
ケ以テ各個重罪ニ對シ死刑宣告ニ及ビタル者

其知行ハ遷延シテ全一年ノ後トセリ夫レ是成
法設立ノ故ヲ以テ一千八百七十三年來死刑宣告

中遂ニ其知行ニ及ビタル者ナシ千八百六十
年「マイ子」政府ノ報告ニ於ルニ新法施行初際ニ

於テハ死刑罪ヲ犯ス者著シク増殖セリ其起由
全ク新法設立ノ所以ト為スベカラズトイヘ^ル

當時本政府尚ホ商議シテ更ニ成法ヲ改定セ
ト企テタリ然レ^ル其^ノ國^ニ事^ニ新^ニ誌^ス第^ニ百^五十^八葉^ニ立^テ法^會

員深ク時弊ヲ討覈探復シテ答ヲ新法ニ歸スベ
カラズ猶ホ之レヲ保存スベシト決定セリ

「ヤン」ジ^ルバニヤ^レニ於テハ漸ク死刑ヲ廢止シテ
之レニ代フルニ唯々十二年間羈絆ノ刑ヲ用ヒ

行シテ成シ遂ケタル者ニハ(即チ豫メ熟圖シテ終ニ之レヲ履行シ了ル者)ニハ公理ノ容ザル所口直シク直チニ死ニ行フベシ次キニ一揆及ヒ至重ノ謀叛モ亦タ謀殺ト其罪ヲ同フス何トナレハ是両罪モ亦タ国家ノ安全ヲ害シ網紀ヲ乱リ營世ノ設ケヲ壞ルモノナレバナリ爾他諸罪ニ於テハ死刑ヲ用ユルト天理ノ至当ト為スベカラズ唯ニ止ヲ得ズ時有所ツテ之レヲ施行スルモ敢テ公正ノ刑トシ通用スベキニ非ス

謀叛者ニシテ死刑ヲ用ユルハ太抵國主ノ身體歐撃ヲ為セシ者ニ限ルトス夫レ國主ノ身體ニ係ル謀叛ハ死刑ニ処スベシト為スノ旨ハ公然刑添上ニモ辨シ得ベキモノニシテ凡ソ立君

独裁ノ國ニ於テハ其主權專權ニシテ敢テ之レヲ冒シ肯スベカラズト為スノ思想ニ始マルモノナリ又タ純然タル國事及ハ全ク之レニ及シテ學術上ノ論ニ於テ大抵死刑ヲ用ユベカラサル物トセリ其論ニ曰ク國事及ナルモノハ其名義得テ左右スベクシテ確然之レヲ定メ難ク亦ク真ニ死刑ニ処スベキ性質ヲ帶ヒズ夫レ苟モ人ノ本務ヲ誤ルヲ以テ忽チ其身命ヲ戮スルモノ豈ニ至公ト云ベケンヤ殊ニ古來実験上ニ於ルニ這的犯罪ニ對シテハ死刑ヲ用ユルモ更ニ懲戒ノ効ナシトス故ニ近世此理ニ本ツキ國事及ニ於テハ常ニ死刑ヲ處行セザリタリ

地國刑法

草案辨由(フアンハイゼ氏)オ四十三條及四十四條ヲアヒヤリ氏十百四十五年刑法記
録オニ百七十七條及七十七條ノ子ル氏死刑論オ
三十三條殊ニ「ヤダ」氏著「ソ」氏所口國事及
對スル死刑論
ヲ參考スベシ

第二項 死刑主張家及ヒ排斥家共先ツ新約全
昏及ヒ旧約全昏ノ旨ヲ摘リ之レニ憑拠シテ以
テ保廢ノ確証ヲ執ラント欲シ豆ニ其着目點ヲ
殊ニセリ

死刑保存家ハ主トシテ「モセス」オ九篇中オ一章
オ六項ニ述アル如ク即チ夫レ他人ノ血ヲ濺ク
モノハ其血復タ他人ニ依テ濺ガルト尢他其ノ
オ二十一篇中オ二章オ十二項及ヒ二十三項ニ
拠リ(魂ニ代フルニ魂ヲ以テシ眼ニ代フルニ眼
ヲ以テス云々)故ラニ準備セル謀殺ニ對シテハ

必ラズ死刑ノ之レニ適當スト為スノ教意ヲ確
守セント欲セリ英ニ又タ新約全昏中「マナウス」
第二十六章オ五十五項ノ語凡ソ劊ヲ執ル者ハ
其劊ニ依テ死スベシト又「バウル」一ノ「オ十
三章ニ君主ハ無益ニ劊ヲ帶ハモノニ非スト」ヲ
ヘシヨハン「オ十三章ニ凡ソ劊ヲ以テ他人ヲ殺
スモノハ復タ劊ヲ以テ殺サル、ト為セル教語
ヲ延キ以テ旧約全昏中謀殺ニ對シテハ死刑ヲ
用ユベシト為スノ教旨ヲ固定セリ
亦タ死刑廢止家ハ之レニ反シテ以為ラク大凡
ソ上文教條ノ本旨ハ直チニ之レヲ施行セシメ
ントニハ非ス唯國君タル者本刑ヲ用ユル事實
ノ畧旨ヲ表スルノミ即チ向キ「アウグス」又

氏「ド」ナチステニ紀元後三百年間「カルタゴ」
モ宗派有リ本派ニ帰依セシ謀殺ヲ以テ告訴サレ
 タル成コトマ管領ニ詣リ為メニ特赦ヲ請ヒタ
 ルタガ語中彼ノ區別甚ク明瞭ナリ
 殊ニ旧約全卷中教旨ノ遵守スベカラサルヲ其
 中屢ニ見ル処ロナリ即チ「モセ」ニ第二編中才
 二十章及ヒ第二十一章ニ於テ奴僕ヲ殺スモノハ
 死刑ト為スベカラスト其他往昔猶太法ノ施ス
 ベカラザルヲ及ヒ其意見ノ年庚不当旧約全卷
 中ニ就テ認メ得ル処ロナリ其数多量罪設例ハ
 ハ上帝輕侮骨肉姦通「サバツ」勸業サバツハ猶自
耶蘇宗ノ土曜日ナリ本日休禁密茨等皆ナ死刑
セザル者ハ其刑死罪タリト為スガ其妄タル死刑保存家スラ猶ホ取ラザ
 ル所ナリ畚他死刑ハ新約全卷中ノ教條ト自ラ
 相ヒ矛盾セリ書中「マテウス」才五篇才三十八章
 及ヒ三十九章ニ曰ク汝等向キニハ眼ニ代フル
 ニ眼ヲ以テシ齒ニ代フルニ齒ヲ以テスノ語ヲ
 聞ケリトイヘ氏然レ氏予ガ汝衆庶ニ告クル所
 ロノ物ハ云々又タル「テウス」才九篇才五十六章
 ニ曰ク夫レ人主此世ニ生スルヤ諸人ヲ賊滅ス
 ル為メニ非ス唯之レヲ保護スルニ在リト「ヨハ
 ニ」才八篇才五章及ヒ七章ニ曰ク凡ソ汝衆生
 中未ダ罪業ヲ作ラザル者ハ勉メテ先ツ所謂罪
 業ナルモノヲ全ク破却レ去レヨト又タ死刑ハ
 特ニ新教ノ意ニ乖レリ即チ教多教祖ノ言及ヒ
 本院ノ定ムル所ニ於テハ依令謀殺トイヘ氏尚

氏「ド」ナチステニ紀元後三百年間「カルタゴ」
モ宗派有リ本派ニ帰依セシ謀殺ヲ以テ告訴サレ
 タル成コトマ管領ニ詣リ為メニ特赦ヲ請ヒタ
 ルタガ語中彼ノ區別甚ク明瞭ナリ
 殊ニ旧約全卷中教旨ノ遵守スベカラサルヲ其
 中屢ニ見ル処ロナリ即チ「モセ」ニ第二編中才
 二十章及ヒ第二十一章ニ於テ奴僕ヲ殺スモノハ
 死刑ト為スベカラスト其他往昔猶太法ノ施ス
 ベカラザルヲ及ヒ其意見ノ年庚不当旧約全卷
 中ニ就テ認メ得ル処ロナリ其数多量罪設例ハ
 ハ上帝輕侮骨肉姦通「サバツ」勸業サバツハ猶自
耶蘇宗ノ土曜日ナリ本日休禁密茨等皆ナ死刑
セザル者ハ其刑死罪タリト為スガ其妄タル死刑保存家スラ猶ホ取ラザ
 ル所ナリ畚他死刑ハ新約全卷中ノ教條ト自ラ
 相ヒ矛盾セリ書中「マテウス」才五篇才三十八章
 及ヒ三十九章ニ曰ク汝等向キニハ眼ニ代フル
 ニ眼ヲ以テシ齒ニ代フルニ齒ヲ以テスノ語ヲ
 聞ケリトイヘ氏然レ氏予ガ汝衆庶ニ告クル所
 ロノ物ハ云々又タル「テウス」才九篇才五十六章
 ニ曰ク夫レ人主此世ニ生スルヤ諸人ヲ賊滅ス
 ル為メニ非ス唯之レヲ保護スルニ在リト「ヨハ
 ニ」才八篇才五章及ヒ七章ニ曰ク凡ソ汝衆生
 中未ダ罪業ヲ作ラザル者ハ勉メテ先ツ所謂罪
 業ナルモノヲ全ク破却レ去レヨト又タ死刑ハ
 特ニ新教ノ意ニ乖レリ即チ教多教祖ノ言及ヒ
 本院ノ定ムル所ニ於テハ依令謀殺トイヘ氏尚

ホ死刑ヲ用ユベカラズト為セリ例スルニ往キ
 ニ「アウグスチヌス氏復タロトマ管領」トナトウ
 ス氏ハ一層ヲ進呈シテ謀殺ノ被告ニ諛リタル
 者ノ為メ赦免ヲ請ヒタル文中之レヲ明カニス
 ル所ナリト
 輒近宗教學士ニシテ代議士ニ舉ゲラレタル者
 存廢兩説黨派ニ碩學五ニ其名ヲ相軋レリ千八
 百四十八年八月八日學國民會ニ於テ諸宗教信
 士四十三人就中其十三人ハ謀殺ニ對スル死刑
 ハ廢止スベカラスト為レ又々其三十人ハ謀殺
 トイヘ氏死刑ハ廢止スベレト為セリ
 第三項ニ爾他死刑廢存ニ係ルニ理由タル殊ニ
 尤ノ疑問ニ関レテ歧分俸折セリ曰ク死刑ノ物

タル果シテ公正ナル乎須要ナル乎將タ適當ナ
 ル乎

甲ハ曰ク死刑ハ或ル重罪ニ對ルテハ無ニ公正
 ノ刑ナリ故ニ又々自ラ須要欠ク可カラサルモ
 ノナリト

乙説ニ曰ク大凡ソ死刑ハ之レヲ公正ノ物ト為ス
 トイヘ氏其須要及ヒ適當トスルハ則チ不可ト
 就中諛説更ニ二様ニ帰レ一ハ則チ單ニ本説ヲ
 柱守レ易フベカラザルノ論トセリ又一ハ或ル
 見込ヲ定メ先ツ之レニ拠テ以テ本説ヲ述ヘ其
 見込中ノ豫定違スルニ及ンテハ終ニ死刑ハ全
 ク廢止シ得ベレトセリ其意見ニ於テ蓋シ以為
 ラク死刑ハ之レヲ存スルモ又々廢スルモ各因

進歩ノ級ニ從テ漸シカラズ殊ニ國民ノ公論及
 ヒ文教昭明ノ度且ツ各土須要トスル刑類ノ設
 ケ方等ヲ酌シテ以テ取舍スル所口有ル可シト
 更ニ又々兩說ニ於テハ死刑ノ公正須要及ヒ適
 宜ト為スノ論皆ナ不可トシテ一一之レニ抗論
 セリ
 最後丁說ニ至テハ凡ソ死刑ノ物タル得テ刑類
 ノ中ニ編伍スベキ性質ヲ有セスト
 第四項 死刑ヲ公正ト為ス者ノ說ニ曰ク爰ニ
 公正ノ尺度ヲ用ヒシニ凡ソ処刑寛酷ノ度ハ犯
 者犯ス所口重罪ノ度ト相合フヲ要ス夫レ四思
 熟因セシ謀殺ニ對シテハ其見然太法ヲ冒シ人
 命ヲ殘賊セシ重罪ニ和スルモノ唯一個死刑ノ

有ルノミ「カニト」氏言フ有リ曰ク如何ニ因凡ノ
 中ニ居クトイヘ凡未々死ト同視スベキモノ無
 シト凡ソ犯罪者為セシ処口ノ物ヲ以テ更ニ之
 レヲ犯罪者ニ加フルハ事理ノ當サニ然ルベキ
 所口是レ彼レニ出ツルモノヲ以テ彼レニ歸ス
 レハナリ「ト」ト年再版百五十九葉ニ詳カナリ
 斯ノ如ク死刑ハ真ニ公正ナル「己」ニ普子ク人
 民ノ信用スル所口ニシテ古未著大ナル重罪ニ
 對シ猶ホ致ハ死刑ヲ用ヒザル場合ニ於テハ人
 民視テ以テ我が太法ヲ敗ラレシト為シ親ラ慘
 酷ナル所業ヲ攀ゲ彼ノ犯罪ニ報ヒ因テ積怒ヲ
 解クノ例亦タ稀ナラザル所口ナリ
 謀殺者モ亦タ能ク自ラ死刑ヲ以テ公正ト為ス

有リ故ニ唯ニ一死初メテ其罪惡ヲ消滅スト覺悟セシ者從來屢々見ル所也
夫レ是ノ公正ノ旨ヲ実施スベキ為メ死刑ヲ行フノ權ハ政府ノ台有スル所ナルガ其之レヲ以テ教戒ノ目的ヲ達セントスルニ於テハ殊ニ是ノ權ニ對シテ抗スベカラサルモノ也
律キニ佞國元老院書記官言フ有リ曰ク
猛將兵士及ヒ時有リ國民トイヘ氏其權利ヲ保護シ意思ヲ伸張セン為メ許多ノ性命ヲ殘賊スルト古今ノ常事ナリ然リ而メ今億兆良民ヲ保護セン為メ重罪者ヲ誅戮スルヲ以テ不当ト為スノ頑陋抑々何等ノ辺ヨリ認メ未
ルヤト

又々上説ヲ排斥シ其論ヲ駁スル者ノ言ニ曰ク
單ニ牽掣ナク公正ノ本源ニ拠ルニ處刑ノ種類及ヒ其輕重ハ立法官得テ豫メ之レヲ一定スベキモノニ非ス夫レ處刑慘酷ノ度ハ犯者某甲ニ加ヘレ損害ノ多少ニ関スルノミナラス殊ニ尚ホ其法度ヲ斂傷スル輕重ニ隨テ斟酌スルヲ要ス故ニ是處刑ハ彼ノ損害ニ比スルニ其寬酷或ハ相ヒ合サズ更ニ又々犯者罪科ノ度ハ其心中思念ノ動キレ起因ニ依テ齊シキト能ワズ是故ニ謀殺トイヘ氏又々必ス死刑ニ處スルヲ以テ
通論トセス

所謂人民死刑ヲ公正ナリト信用シ普子ク之レヲ歆慕スト為スノ說抑々懲リト云ベシ人民ノ意

見若シ果シテ斯ノ如ク昏迷ヲ被ルニ於テハ立
 法官宜シク注意シテ夙トニ之レヲ脱却セシム
 ベシ唯タ夫レ一人ノ罪科ハ即チ汎ク全国社會
 同胞ノ一罪ナリ故ニ之レヲ除クハ其惡ト社會
 一般ニ蔓衍シ風俗ヲ敗ラシムベカラザルノ止
 ムヲ得ザルニ出ヅルノ
 又メ重罪者其処刑ヲ以テ公正トシ信服スルヤ
 否ハ未タ死刑ノ当否ヲトスルニ足ラズ或ハ問
 々其刑ニ服スル者有リト虽未タ一般ナラザ
 ルヤ必ナリ故ニ終ニ悔悟セザル者ニ於テハ彼
 ノ公正ノ証ヲ見ル所口ナシ
 殊ニ又タ或ル場合ニ於ル生殺ノ權ハ常ニ政府
 ノ占有スル所口ニシテ敢テ之レヲ争ヒ得ベカ

ラズト然ラバ則チ國家司法ノ權タル殺戮ヲ專
 ニスルヲ以テ其至極ノ疆界線ヲ踰ユルモノト
 ス夫レ犯者道德ヲ敗ルノ度ハ人カノ得テ測定
 スベキニ非ズ然ルヲ之レニ對シ意ノ適スル所
 ニ後ニ限リ有ル罪科ニ加フルニ限リ無キ刑ヲ
 以テスレバ也

第五項 死刑ハ國家ノ須要トスルノ説ニ曰ク
 夫レ世ニ巨害有ル重罪者ニ對シテハ死刑ヲ用ユ
 ルニ非サレハ社會ヲシテ充分安全ノ思ヒヲ為
 ケレムベキ刑類一モ他ニ有ルヲ無シ「モシテス
 キ」曰フ有リ其言當ヲ得タリト云ベシ曰ク
 處刑ハ此彼ノ所為ヲ平均スルノ処置ニシテ
 凡ソ他人ノ安全ヲ害シ又タハ之レヲ害セン

ト企テタル者ニハ社會又々其安全ヲ奪ヒ得ル者トス夫レ死刑ノ物タル元ト事理ノ本然ヨリ生シ是非ノ源線ヨリ斟酌セシモノニレテ苟モ人命ヲ害スルカ又々ハ之ヲ害セント企テラレ者ニハ死刑復々固ヨリ其所ナリ其之レヲ用ユルハ則テ我社會ノ病症ヲ診シテ以テ適當ノ藥石ヲ投スルモノトス

自他尚ホ同氏ノ金言有リ曰ク夫レ己ニ人命ヲ蔑視暴賊セシモノニ將來漸乎ト復ヒ其罪惡ヲ追ワザラレムルモノ唯一個死刑ノ良法有ルノト

然レ氏死刑ハ汎ク諸種重罪ニ偏倚心有ル者ニ其実施ヲ防遏スベキ為メ極メテ緊要ノ切ヲ奏スル者トス其敢テ之レヲ犯サントスルニ臨ミ典刑ノ忍レ心中百出シトレシデレブルグ氏天法才百五十九葉（仮令へ性命ノ重キヲ思ワズ身躬ヲ刑戮ヲ輕ニスル者有リト亟モ概スルニ太抵死刑ハ衆人ニ對シ胸衷ニ萌ス所口ノ兇心ヲ忌嚇シテ以テ能ク之レヲ壓塞スルノ良畧トス是故ニ或ハ一揆或ハ争鬪擾乱又々ハ尋常平時中共國家必ス本刑ヲ欠キ得サル所口タリト又々上説ニ抗スル者ノ言ニ曰ク夫レ刑罰ハ仮令單ニ公正ナル物トイヘ氏政府擧テ之レヲ施行スルハ法度ヲ維持スル為メ本刑ノ極メテ欠クベカラザル場合ニ限ルトトス

故ニ國家司法ノ權タル正ニ危疑忌懼シテ漫ニ

司法省

挙クベカラザル嚴刑ヲ執リ其已ニ手中ニ陥リ
 タル犯罪者ニ擬レ通常ノ場合ニ於テ之レヲ處行
 レ其炎威ヲ張ルベキ方便ト為スベカラザル
 確乎トレテ証レ得ヘレ
 爾他又々從來經驗ユル所口ニ從フニ死刑ハ更
 ニ怒赫ノ切用アルモノニ非ス往キニハ死刑処
 行甚々繁夥ナリレトイヘ氏之レニ頼テ以テ死
 刑ニ如スベキ犯罪消滅セズ又々減少セズ却テ
 政府行フ所口ノ死刑先唱ヲ為レ惣テ性命犯ス
 ベカラズト為スノ人心ヲ翻ヘレ縁テ全ク之レ
 ニ反對セル所為ヲ働カレム恰モ猶ホ上ニ答刑
 ヲ用ユレバ下亦々之レニ働フガ如シ
 亦未處刑ノ嚴酷ナルハ未タ以テ重罪犯行ヲ禦

クニ足ラズ却テ其必定之レヲ防クニ足ル然ル
 ニ方今死刑ノ物タル其處行ハ非常度外ト為ル
 ニ至ルヲ以テ得テ必定ト云ベカラズ從來事實
 上ニ就テ聞ク如ク重罪犯者其罪事ヲ犯スニ際シ
 心中竊カニ期レテ以テ為ラク此事蓋レ露見ニ至
 ラザラン後令露見ニ至ルモ亦々成法ノ嚴刑果
 レテ予ニ加ヘザルナラント
 是故ニ往々死刑ヲ廢止スルノ国有リトイヘ氏
 猶ホ其重罪犯者ノ數増加ニ至ラザリタリ
 但レ各個重罪犯者死刑ニ如セラレテ以テ爾後復
 メ其罪惡ヲ追テ能ワスト為ス一信ハ則チ信ナ
 リ然レ氏処刑ハ素ト悔悟ヲ主トスルモノナル
 が死刑ノ如キハ全ク其原旨ニ悖ル者トス其方

サニ斬首ヲ行ワントスルノ時ニ迫リ太抵亮分
且ツ真正ナル悔悟ニ至リ得ズ蓋シ各個犯罪者
悔悟セザル者ナカラシムニ今是悔悟ニ及バンノ
スレテ直チニ死ニ附スルモノ亦タ粗忽ト為ス
ベカラズヤ

第六項 又タ死刑ヲ批難スル者ノ説ニ曰ク死
刑ハ「マ」ン「タ」ム及ヒ「ロ」レ「」氏以來論セシ如ク
凡ソ適宜ノ処刑中ニ須要ナル性質ヲ欠クモノ
ナリ即チ處行後取り消シテ能セズ又タ區別無
シ其或ハ取消シト為スモ羈絆ノ刑ニ於ルカ如
クナラズレテ其義全ク殊ナリ故ニ至当ノ裁判
明了ノ判事トイヘ氏或ハ誤断ヲ免レ不過テ死
刑ニ行ヒシモノ古來歴々史乘ノ傳フル所ナリ

殊トニ想像等ノ秘術ヲ以テ推定驗究シテ遂ニ
一車ヲ發明セシモノ有リ即チ「ラ」ブ「ラ」ク及ヒ「ポ
イ」ソ「」氏銳意研精シテ死刑判決ノ公正ト不公
正ノ比準ヲ定メ幾何學ニ依テ其差ヲ測定セシ
カ此推究ニ従ヘバ仏國ニ於テ陪審判決セシ死
刑二百五十七箇中必ス一個枉冤有ルモノナリ
且ツ死刑ハ區別ナシ審カニ云ヘハ性キニハ死
刑ノ種類數個有リレガ一回之レヲ廢シテ唯斬
首ノ一科ニ歸セシヨリ死罪ニ處セラルル者其
罪科ノ輕重復々得テ區別スベカラズ而ルニ同
シク死刑ニ知スルノ重罪トイヘ氏其内自ラ數
般ノ輕重有リ單ニ是輕重區別ナキ「」ヲ以テス
ルモ已ニ死刑ヲ不可トスルニ足ルト

更ニ又々死刑主張家ハ上ニ論述セシ處刑中ニ
須要ナル性質云ニヲ以テ才一皮相ノ理ニ出ツ
ルモノトス

其他死刑ノ取り消スベカラザルハ唯ニ豫メ裁
判精密ヲ極メ及ヒ其保証ヲ定メテ以テ已ニ足
レリトス故ニ本末死刑ヲ以テ可ト為スベケレ
バ唯是一事ヲ以テ更ニ其是非如何ヲ顧慮スル
ニ足ラス

又々犯罪輕重ノ度ヲ判定スルニ至テハ一ハ裁
判官ノ明察熟思ニ任ス是レ其見込ニ從ヒ死刑
ヲ減シテ更ニ他刑ヲ用ヒ得ベキ者タリ或ハ又
々此方法ニ於テ裁判官私論偏頗ヲ行フノ思レ
有ルニ於テハ正シク實際ノ情状ニ從テ之レヲ

斟酌スル一國王ノ特赦ニ委ス故ニ罪科輕重ノ
區別モ亦タ已ニ明ニ再ヒ又々此ノ牽合附會ノ
説ヲ駁シテ曰ク夫レ死刑ト羈絆ノ刑ハ其輕重
ノ距離懸隔已ニ論ヲ待タ不然ルニ今マ刑ヲ兩
者ノ間ニ擇ブノ權ハ刑法上ニ要トスベキ所謂
必定ノ意ニ乖戾ス殊ニ又々切ニ裁判官ニ望ム
所口ノ責任ノ度ヲ踰ユルモノトス
ヨハニ氏十
ハ百六十八
ヨハニ氏十
ハ百六十八
ヨハニ氏十
ハ百六十八

年編輯セシ北獨逸聯邦刑法草案才三十八葉及
限才十六葉ヲ参考ス
特赦ノ權モ亦タ之レヲ濫用シテ尋常和解ノ方
便ノ如クナルニ至ラレメバ終ニ全ク特赦ノ旨
ニ悖リ而メ其君主果シテ之レヲ以テ真ニ國家
ノ所益ト認メ得ズ却テ為メニ心中苦痛ヲ生シ

無益ノ辛勞ヲ添フルトス瑞典ノ太子「ア」スカ
「コ」氏及譯「千」八百四十年「ラ」イ「プ」

殊ニ屬ニ特赦ヲ行フハ死刑ヲ用ユルノ原旨即
チ前ヘニ論辨セシ大功用タル忌赫カヲ失フモ
ノタリト

第七項 方今檻獄設置ノ况景ニ於テハ遂ニ死
刑ヲ廢止セザルノ仕方ヲ認取ス何トナレバ其
設ケタル充分彼ノ死刑ニ代用スベキ備ヘナク

又タ人民社會ヲレテ重罪者ニ對レ之レニ賴テ
安全ノ思ヲ興サシメ得ガレバ也「ロ」レイ「」氏言

フ有リ曰ク法度ヲ保護スルハ須ラク堅忍ナル
ヲ要ス若レ左手ヲ以テ其一端ヲ歡ケレハ宜シ

ク直チニ右手ヲ以テ之レヲ購フべシ夫レ方今

重罪者ヲレテ切ニ禁獄ヲ悍畏セシムルハ實ニ
急務トス然ラザレハ國家遂ニ死刑ヲ廢止シ得

ベキ期ナレ政府ハ謀殺者ノ性命ヲ救サンヨリ
寧ロ無辜良民ノ非命ニ罹ラザルヲ欲スレバ也

ト
然ルニ或ル論者ニ於テハ方今檻獄設置ノ具備

セサルヲ傍ラ妨ゲナレトス即チ死刑ヲ保存ス

ルノ起因及ヒ檻獄繕治ヲ急務トシテ切ニ之レ

ヲ渴望スルヲ皆チ彼ノ不備ヨリ生ス而メ其望

ム所口ノ檻獄ノ如キハ處刑嚴且ツ必ニシテ犯
罪者ハ言ニ及ハズ汎ク人民一般ニ對シ常ニ刑
威ノ嚴烈ヲ示スベキモノナレバナリト
第八項 結尾ニ又タ爰ニ於テハ死刑ニ就キ論

理上ニ於テ定ムル所ノ功用及ヒ品格ノ如キ
 ハ措テ問ワスルソ純粹ノ刑法ナルモノニ於テ
 ハ其共由人民ノ認定及ヒ意思ニ根據スルヲ
 述ヘントス曰ク夫レ人民或ル成法ヲ以テ設例
 ヘハ方今死刑ニ於ル如ク公正且ツ須要ト認定
 スルニ於テハ立法官後々抗抵レテ之レヲ廢ス
 ベカラス其之レニ抗スルハ單ニ則チ不可其不
 可タル所以ノモノハ夫レ見今ノ形状速カニ顛
 覆スルカ又ハ是ノ間々ニ際レ特ニ容ルベカラ
 ガル重罪蜂起シ為メニ死刑ヲ用ヒザル能ワザ
 ルノ場合ニ至レバ往キニハ人民ノ意見ニ於テ
 死刑ハ稍ニ欠キ得ベシト為セシヲ今者全ク翻
 覆スルノ思レ有レバナリ然レ氏今来(後令一般

ナラザルニモセヨ我獨乙国ニ於テハ死刑ヲ廢
 スベカラスト為スノ説多クハ一般人民ノ認定
 シテ以テ確守スル所ニ非ス却テ唯ニ論理家懸
 空考索ノ成果ニ非サレハ皮相者雷同ノ言ニ出
 ツモノナリ然レ氏擬スルニ之レヲ廢スルハ多
 少人民一般危ブム所トセバ唯其漸次ニ廢止
 スルヲ民情ニ從ヒ真ニ純粹立法ノ目的ニ合フ
 モノトス
 死刑ヲ認メテ以テ須要ト做スル凡ソ是非辨別
 有ルノ人民ニ於テハ皆ナリト為スノ説有リ
 是レ死刑廢止家ノ排ケテ取ラザル所ナリ其辨
 ニ謂ラク陪審屢ニ死刑ニ知スベキモノヲ以テ
 無罪トシ放免スルハ蓋シ唯ニ死刑ノ忌嫌スベ

キ物ナルニ由ル又々各個死刑宣告及ヒ斬首ノ
事務ニ関係セシ者常ニ厭忌ノ語ヲ吐テ以テ悖
戾ヲ徴スル等皆十須要トセザルノ証ナリ之レ
ニ及レテ死刑ヲ漸次ニ廢止スルノ基礎ニ於テ
ハ已ニ百年未死刑史中ニ論述セル如ク其豫算
具サニ備ワル故ニ今者彼ノ豫算ヲ履ミ果シテ
全ク之レヲ廢止レ得ルノ進歩ニ達セシムルモ
ノハ則チ時ト

第八款

弓結

大凡ソ該冊子中ニ掲載セル事件ノ要領ヲ簡ニ
摘収スルニ則チ左ノ如シ

第一項 千七百年代迄ハ各国立法太抵皆十死
刑ヲ以テ諸刑類ノ標準トナシタルカ漸ク方今
ニ至テハ羈絆ノ刑ヲ以テ其基礎ト為シ死刑ノ
如キハ重罪ノ他ニ拔シテ特ニ重大ナルモノニ
ノミ用ユベキ非常ノ刑ト為シタリ
死刑中罪科ノ輕重ニ應シ諸様ノ方ヲ用ユルハ
方今全ク廢止シテ唯單ニ重罪者ノ性命ヲ絶ツ
ヲ旨トシ太抵斬首ノ一途ニ歸レタリ
獨逸英吉利亞米利加等ノ諸国ニ於テハ斬罪ヲ

行フ事公衆ニ於テセズ故ニ庶人之レヲ縱視ス
ル能リズ唯若于証驗者ノ茲ニ陪列スルヲ得ル
ノミ

第二項 已ニ死刑ヲ廢止セシ國數個有リ但シ
其内全ク之レヲ廢シ事件ヲ問フズ時勢ニ関セ
ズ復タ施行セザルモノ有リ或ハ軍律戰時裁判
即時裁判及ヒ海上裁判ヲ除クノ外平時ニ於テ
ハ一切之レヲ廢止セシモノ有リ其戰時裁判即時
裁判及ヒ海上裁判ノ如キモ唯真ニ戰爭及ヒ劫
畧ノ際ニ方テノミ之レヲ用ユルトス其國々
ル即チ「サキセン、ラルデンブルグ」「アンハルト」「ブ
レメン」「ノヒレヤテル」別「ホルトガル」「ルメニエシ」
「サンマリノ」及ヒ南亞米利加中教國是ナリ

又々他ノ諸國ニ於テハ先ツ死刑ヲ廢シ暫之レ
テ後タ設置セシモノ有リ即チ墺地利及ヒ獨逸
國中二三ノ小國并ニ近時ニ至リ「フライブルグ」
州是ナリ

第三項 爾他諸國死刑罪ノ箇條多少減少セザ
ルモノ無シ

方今諸國立法ノ期スル所口周子ノ學術上ニ講
究スル所ノ意ト相ヒ合シ死刑罪ハ唯太禁ヲ犯
シ人命ヲ殘賊セシモノ及ヒ尤モ重大ナル叛逆ニ
限ルトトセリ

第四項 凡ソ殺害ヲ為セシ者ヲ以テ其所為死
刑ニ係ルノ性質有リト判決スベキ徵候ヲ定ム
ルト太々困難ナリ故ニ其徵候トスル所口亦々

大イニ不同有リ
 一二州ノ立法ニ於テハ某甲ヲ殺サント欲レ是
 目的ヲ以テ着手セシ企テ己ニ其徵候ト為ス即
 今午八百五十二年墺国刑法ノ如キ是ナリ然レ
 氏衆国立法太抵尚ホ一層密ニ檢索シテ其所為
 タル豫メ純ラ回慮熟因セシモノ力又々ハ他ニ
 期スル所口ノ目的ヲ達セシ為メナルカラ明察
 セント欲ス是レ即チ初メテ故ラニ為レタル決
 意ト他事着手ノ際々之レカ為ノ犯スノ別有リ
 然レ氏太禁ヲ犯レ他人ヲ殺害セシ者ヲ死刑ニ
 行フベキ徵候ハ是回慮熟因ノ場合ニ限ルト為
 スノ成法ハ亦々太々稀レナリ之レニ及レテ多
 クハ殺害ヲ他ノ重罪ト錯ンデ以テ彼ノ徵候ヲ

定ム然ル片ハ犯者故ラニ其殺害ヲ然レ氏豫メ
 熟因セシニ非ス為セシカ又々ハ死ヲ確定セス
 唯、多クハ之レニ至ルナラント推察セシノミ
 或ハ他ノ重罪犯行ノ際々不回死亡ニ至ラレメ
 レ等ノ區別有リ
 又々他ノ立法ハ若口ニ死刑ニ如スベキ殺害ノ
 性質ヲ辨明セスレテ以テラク謀殺ノ形状ニ對
 レ至当ノ決定ヲ為スハ各々其實際ニ臨ミ天賦
 ノ明法ヲ活用セシムルニ在リト
 須ラク死刑ニ如スベキ殺害謀殺及ヒ太抵死刑
 ト為スベカラザル殺害故殺ノ分別ニ於テ從來
 各国唱フル処口教説有リ今マ蒐メテ以テ之レ
 ヲ附録(ハ)号ニ登記シ爰ニ要スル所口ノ目的ニ

供セント欲ス

即チ其各箇持論ヲ引ク如ロノ象書ハ千七百九十四年字漏生国法律綱領千八百十年佛国刑法書千八百五十二年奥地利刑法書千八百六十八年伊多利亜国刑法草案(但レ是刑法草案ニ於テハ死刑ヲ廢止セントスルモノナリ)及ヒ英国刑法原論等ノ條例ニ係ルモノナリ

一種特異ノ立論(所謂死刑ハ謀殺ノ極メテ至重ナル場合ニ限ルト為スノ説)ハ「ハンブルグ」及ヒ「ブレメン」ノ刑法草案ニ詳カナリ

第五項 死刑ハ特異ノ性質有リテ他ノ比ニ非ス殊ニ其死ニ如スベキ徵候ヲ豫メ亭連ナク確定レ或ハ實際事實ニ當リ断然判定スルノ困難及

ト各箇犯罪特自ノ差違ヲ斟酌スルノ須要等ニ基キ豫メ場合ニ因リ死刑ヲ減レテ他刑ヲ科スベキ條例ヲ設ケタリ即チ下條ニ之レヲ列擧セシ

甲 幼年「バイエルン」及ヒ「ブラウンシュハイグ」等ノ如キ二三ノ立法ニ放テハ其期ヲ若冠中即チ二十一歳迄トス或ハ老年「ベルン」及ヒ「ウアート」等ノ立法ニ於テハ其齡ヒラセ十歳以上トス是兩者ニ對シテハ死刑ヲ科セザルトトス

乙 犯罪ノ情状ニ從ヒ死刑又タハ羈絆刑ヲ(終自若クハ有期)擇ヒ科スルト裁判官ノ權ト為ス有リ設例ハ瑞典ニ於テ千八百六十四年来及ヒ奥国千八百六十八年三月新律草

案是ナリ

丙己ニ死刑宣告ニ及ヒタル者ニ於テ寛恕スベキ事由ノ見然スルニ於テハ之レヲ奏呈シテ特赦ヲ請フテ裁判官ノ権且ツ義務ト為ス有リ即チ墺國見今ノ制度及ヒ往時「ハ」ニノフルニ於ル如レ（千八百四十年ノ刑法）
各九十七條

丁寛恕スベキ事由ヲ審カニ判定シテ死刑ニ代フルニ羈絆刑ノ尤モ重キモノヲ執リ之レヲ終身又タハ有期ヲ以テ科スルテ裁判官ノ権且ツ職務タリ
何等ノ物ヲ認メテ寛恕スベキ事由ト為スベキカラ成法中ノ條例ニ掲グルモノ有リ

即チ「ブラウン」シエハイグノ如キ是ナリ或ハ唯判事ノ思慮ニ任スル有リ即チ佛蘭西白

兪義字漏生等是ナリ
寛恕スベキ情状ヲ觀テ以テ之レヲ採擇スルノ権ハ一般諸重罪ニ於テ皆十施スベシト為スモノ有リ即チ仏蘭西白兪義ノ如キ是ナリ或ハ唯死刑ニ処スベキ重罪ニ於テノミ之レヲ用ユル有リ即チ「ベル」及ヒ「ウ」ワ「ト」是ナリ又タ或ハ一二重罪ニ限ルト為スモノ有リ即チ字漏生及ヒ「ヘッセン」タルムスタツトノ如キ是ナリ
凡ソ寛恕スベキ事由ノ有無ヲ決定スル「」或ハ陪審ノ任トシ但レ或ハ立法上ニ於テ

之レニ許スノ權勢全備スルヲ以テ自ラ然
ルモノ有リ即チ佛國ノ如キ是ナリ或ハ臨
時ノ問ニ答フルモノ有リ即チ字漏生國是
ナリ或ハ裁判所ノ權トス即チ白肅義及ヒ
獨ニ國中諸邦大半是ナリ

戊教國治罪法ニ於テ死刑ヲ科スルニ方リ重
罪者ノ白狀ヲ要スル有リ設例ハ八墺地利
及ヒメクレンブルグ是ナリ

第六項 往時ハ死刑ニ処スベキ重罪者ニ對シ
君主特赦ヲ行フノ權全ク異論ニ屬セレガ之レ
ニ及シテ見今ハ各國太抵死刑宣告ニ及ヒタレ
者ヲ更ニ死ニ処スルノ特赦ノ大權ヲ掌握スル
者(國君)之レヲ特赦ニ付スベカラズト為スノ決

意ヲ宣言スル迄ハ敢テ死刑ヲ行ヒ得ザルヲ
リ

大凡諸國皆ナ已ニ數十年來死刑處行ノ數ハ其
宣告教中僅カニ百分ノ一二ニ居ルノミ

第七項 夫レ死ヲ減スルハ只特赦ノ一途ヲ以
テレ或ハ數般重罪ニ對シテハ死刑ヲ廢シ又タ
ハ全ク之レヲ廢止シテ惣テ復タ用ヒザル等有
リトイヘ氏之レニ関シテ重罪者増減スルノ確
徵ハ今ニ至テ猶ホ正シク檢索シ能ワザル所ナ
リ然レ氏一般概スルニ死刑ニ處スベキ至重罪
ノ減少セレハ已ニ著シク着目スル所ナリ

附錄(一)号

千八百六十年一月一日ヨリ千八百六十九年一月一日迄全五年間北獨逸聯邦各部に於て死刑宣告及び其処行比較一目表

才一 字漏生国

謀殺及び共犯

死刑宣告 百三十五

同 處行 二十四

上線親族故殺

死刑宣告 二

同 處行 〇

或る重罪ヲ犯ニ際セル故殺

死刑宣告 十四

同 處行 二

放火但レ人命墜損

死刑宣告 十

同 處行 〇

合計 死刑宣告數

百六十一

同 處行數

二十六

近年攻畧セル郡国(但レ「ハンノブル」ハ格外トス)ニ於テハ未タ政表ノ素ヲ纂輯スルアタハズ毎歳平均死刑宣告ニ及ブ者三十二箇而ノ其内遂ニ處行ニ及ビシ者五人故ニ百分ノ十六人トス又タ其処行ニ至ラザル者ノ内死亡及ビ自殺トモ合テ五人爾余皆十減シテ羈絆ノ刑ト為リタリ又タ本表中ニハ千八百六十四年不席裁判申渡ノ數ヲ加ヘズ「ハンノブル」州

謀殺

死刑宣告 七

同 處行 五

故殺

死刑宣告 三

放火 同日 處行 一
死刑宣告 二十

同日 處行 〇

死刑宣告數 三十

同日 處行數 六

合計

「ハンノフル」ニ於テハ目今猶ホ施行セル千八百四十年八月八日ノ刑法各ハ故ラニ他人ヲ殺サント欲シ全ク是意ヲ以テ為レタル故殺(其二百三十一条)及ヒ放火ノ尤モ重大ナル場合ニ於テハ(百八十三条)皆十之レヲ死刑トス

第二 王国遺跡

謀殺 死刑宣告 十三

同日 處行 〇

強賊故殺ヲ兼ヌ 死刑宣告 二

同日 處行 〇

合計

死刑宣告 十五
同日 處行 二

本表中ニ個死刑知行有リ何等ノ罪科ニ係ルカ未タ考フル能ワズ又々宣告シテ處行ニ及バサリレモノ皆十減シテ羈絆ノ刑ニ科セラレタリ

第三 大公国(ツセン但シ北獨シ聯邦ニ屬セ)

謀殺 死刑宣告 二

同日 處行 〇

合計 死刑宣告數 二

同 處行教

大公国へソセン全部中死刑宣告九人有リ其罪科ハ謀殺毒殺及ヒ強盜殺十リレガ皆死一等ヲ減ンレテ終身懲役ト為セリ本表中二人ノ一ハ即チ強盜殺ニ係ル

第四 大公国「メクレンブルグ、シェーリン」

謀殺 死刑宣告 四

同 處刑 二

放火 人死ヲ兼ヌ 死刑宣告 一

同 處行 〇

合計

死刑宣告教 五

同 處行教 二

死刑宣告中其三人ハ特赦ヲ以テ終身懲役ニ

科セラレタリ

第五 大公国遼遜 謀殺 死刑宣告 三

同 處行 二

放火 人死ヲ兼ヌ 死刑宣告 〇

同 處行 〇

合計 死刑宣告教 四

同 處行教 二

右ノ内二人ハ特赦ヲ以テ終身懲役

第六 大公国「アラウン、シェバイグ」 謀殺 死刑宣告 一

同 處行 〇

放火 人死ヲ兼ヌ 死刑宣告 〇

同 處行

合計

死刑宣告教
同 處行教

一 〇

右宣告ニ及ビシ者特赦ヲ以テ終身懲役

第七 公国「サキセン、マイニンゲン」

謀殺

死刑宣告

三

同 處行

一

放火人死ヲ兼ヌ

死刑宣告

〇

同 處行

〇

合計

死刑宣告教
同 處行教

一 三

内二人ハ特赦ヲ以テ終身懲役

第八 公国「サキセンアルテシブルグ」

謀殺

死刑宣告

一

同 處行

一

放火人死ヲ兼ヌ

死刑宣告

〇

同 處行

〇

合計

死刑宣告教
同 處行教

一 一

第九 公国「サキセン、コーブルグ、ゴーター」

謀殺

死刑宣告

二

同 處行

〇

合計

死刑宣告教
同 處行教

二 〇

右ノ内一人特赦ヲ以テ終身懲役又々一人ハ

裁決前自殺

第十

候国「シェワルツアルグ、ソニデルスハウゼン」

謀殺

死刑宣告

一

同 處行

一

合計

死刑宣告数
同 處行数

一

右罪科ハ賊殺

第十一

候国「ロイス古勢」

謀殺

死刑宣告

一

同 處行

一

合計

死刑宣告数
同 處行数

一

第十二

共和府「ハムブルグ」

謀殺

死刑宣告

二

同 處行

二

合計

死刑宣告数
同 處行数

二

総計

死刑宣告
死刑處行

二百二十八
四十四

右二百二十八箇死刑宣告中ノ教般ノ重罪有
リ其多寡即チ左ノ如シ

謀殺

死刑宣告

百七十八

同 處行

四十一

故殺

死刑宣告

五

同 處行

一

他罪犯為中殺害

死刑宣告

十六

同 處行

二

放火ノ特ニ重キ情状 死刑宣告 三十一

同 処行 。

総計

死刑宣告数 二百二十八
同 處行数 四十四

死刑宣告有リトイヘ氏處行ニ及ガザリレ邦ハ即チ大公国「ヘッセン」公国「ブラウンシュバイグ」公国「コールブルグ、コータ」是ナリ
聯邦中爾他諸部ニ於テハ右年間中一モ死刑宣告無カリタリ

口号

字漏生国ニ於テ千八百十八年ヨリ同ノ六十五年迄全四十八年間死刑判決ヲ以テ更ニ国王ノ

允裁ヲ請フベキ為メ司法卿ニ進呈セシ元教併ヒニ終ニ允裁ヲ經テ死刑處行致ハ特赦ニ及ビタルモノ、比較表

| 年数 | 進呈元数 | 死刑處行 | 特赦 |
|--------|------|------|----|
| 千八百十八年 | 十七 | 九 | 八 |
| 千八百十九年 | 二十四 | 八 | 十六 |
| 千八百廿年 | 二十一 | 十三 | 八 |
| 千八百廿一年 | 二十五 | 十四 | 十一 |
| 千八百廿二年 | 二十。 | 五 | 十四 |
| 千八百廿三年 | 二十七 | 十。 | 十七 |
| 千八百廿四年 | 二十二 | 十二 | 十。 |
| 千八百廿五年 | 十五 | 四 | 十一 |
| 千八百廿六年 | 十六 | 五 | 十一 |

| | | | |
|---------|-----|-----|-----|
| 千八百七十七年 | 二十四 | 二十七 | 十七 |
| 千八百七十八年 | 二十九 | 十二 | 十七 |
| 千八百七十九年 | 十七 | 五 | 十二 |
| 千八百八十年 | 十八 | 四 | 十四 |
| 千八百八十一年 | 二十二 | 九 | 十三 |
| 千八百八十二年 | 二十八 | 二 | 二十六 |
| 千八百八十三年 | 三十 | 二 | 二十八 |
| 千八百八十四年 | 二十一 | 二 | 十九 |
| 千八百八十五年 | 三十六 | 七 | 十九 |
| 千八百八十六年 | 二十二 | 四 | 十六 |
| 千八百八十七年 | 三十四 | 四 | 三十 |
| 千八百八十八年 | 十七 | 七 | 九 |
| 千八百八十九年 | 二十四 | 八 | 十六 |

| | | | |
|---------|-----|-----|-----|
| 千八百四十年 | 二十三 | 五 | 十八 |
| 千八百四十一年 | 十四 | 二 | 十二 |
| 千八百四十二年 | 三十九 | 八 | 三十一 |
| 千八百四十三年 | 二十九 | 五 | 二十四 |
| 千八百四十四年 | 二十五 | 十 | 十四 |
| 千八百四十五年 | 二十七 | 七 | 十八 |
| 千八百四十六年 | 二十三 | 六 | 十七 |
| 千八百四十七年 | 二十八 | 七 | 二十二 |
| 千八百四十八年 | 二十六 | 一 | 二十五 |
| 千八百四十九年 | 二十六 | 七 | 十九 |
| 千八百五十年 | 四十二 | 十五 | 二十三 |
| 千八百五十一年 | 六十 | 二十 | 三十四 |
| 千八百五十二年 | 四十 | 二十五 | 十 |

同法節

| | | | |
|---------|-----|-----|-----|
| 千八百五十三年 | 四十 | 三十 | 八 |
| 千八百五十四年 | 三十七 | 二十八 | 六 |
| 千八百五十五年 | 四十五 | 二十八 | 十三 |
| 千八百五十六年 | 三十六 | 二十六 | 九 |
| 千八百五十七年 | 四十二 | 十四 | 二十七 |
| 千八百五十八年 | 三十八 | 四 | 三十一 |
| 千八百五十九年 | 二十五 | 四 | 二十 |
| 千八百六十年 | 二十四 | 二 | 二十一 |
| 千八百六十一年 | 三十七 | 五 | 三十 |
| 千八百六十二年 | 三十二 | 三 | 二十九 |
| 千八百六十三年 | 三十 | 十二 | 十七 |
| 千八百六十四年 | 三十七 | 五 | 三十 |
| 千八百六十五年 | 三十九 | 八 | 二十九 |

総計 千三百七十三 四百四十 八百八十人

右千三百七十三箇死刑宣告中允裁ヲ経テ死ニ行ワレシモノ四百四十又々特赦ニ及ビタル者八百八十八合シテ千三百二十八タリ其ノ餘遺四十五ハ即チ死凶(自殺及ヒ天然死)或ハ遁亡等ニ不席裁判ニシテ未タ決局ニ至ラザル者ニ係ル

又々表中列記シタル初段ノ數(死刑宣告進呈元數)ハ帝國政表局千八百五十四年ニ係ル死刑表ニ登録セシ數ト殆ンド符合セリ然レ氏其二段及ヒ三段ノ數(死刑處行及ヒ特赦ノ數)ニ至テハ彼ノ死刑表ニ掲クルモノト大ヒニ差違有リ是レ政表局報告中ニ於テ區別シテ未決ト為セシ

數百二十五個ヲ本表中ニハ資テ以テ合算スレ
ハナリ

「ゴルドダンメル」氏記録才二卷百葉及ヒ才十三
卷百六十四葉中千八百五十八年ヨリ同ク六十
年迄及ヒ千八百六十一年ヨリ同ク六十三年迄
ニ係ル表中總計數ハ爰ニ掲ゲレモノト相違セ
リ其所以タル蓋シ彼ノ記録中ニ於テハ前年刑
名宣告セシトイヘ氏其決局迄テ右年間中ニ係
ルモノヲ再々合算スレバナリ

(ハ) 号

列尹州ニ於テ千八百十八年ヨリ同ク五十一年
迄死刑宣告ヲ以テ國王ノ允裁ヲ請ク因テ遂ニ
處行又々ハ特赦ニ行ワレタルモノノ毎年比較表

| 年數 | 奏聞數 | 死刑處行 | 特赦 |
|--------|-----|------|----|
| 千八百十八年 | 四 | 二 | 二 |
| 千八百十九年 | 十 | 一 | 九 |
| 千八百二十年 | 二 | 〇 | 二 |
| 千八百廿一年 | 十 | 〇 | 十 |
| 千八百廿二年 | 六 | 〇 | 六 |
| 千八百廿三年 | 六 | 〇 | 六 |
| 千八百廿四年 | 七 | 四 | 三 |
| 千八百廿五年 | 七 | 一 | 六 |
| 千八百廿六年 | 六 | 二 | 四 |
| 千八百廿七年 | 十二 | 〇 | 十二 |
| 千八百廿八年 | 四 | 〇 | 四 |
| 千八百廿九年 | 五 | 〇 | 五 |

| | | | |
|---------|-----|---|-----|
| 千八百三十年 | 七 | 〇 | 七 |
| 千八百三十一年 | 十二 | 一 | 十一 |
| 千八百三十二年 | 十四 | 〇 | 十四 |
| 千八百三十三年 | 二十四 | 〇 | 二十四 |
| 千八百三十四年 | 十四 | 〇 | 十四 |
| 千八百三十五年 | 二十一 | 〇 | 二十〇 |
| 千八百三十六年 | 六 | 〇 | 六 |
| 千八百三十七年 | 二十一 | 〇 | 二十一 |
| 千八百三十八年 | 六 | 〇 | 六 |
| 千八百三十九年 | 九 | 〇 | 九 |
| 千八百四十年 | 八 | 〇 | 八 |
| 千八百四十一年 | 十四 | 二 | 十二 |
| 千八百四十二年 | 十八 | 〇 | 十八 |

| | | | |
|---------|-------|-----|-------|
| 千八百四十三年 | 十一 | 〇 | 十一 |
| 千八百四十四年 | 五 | 一 | 三 |
| 千八百四十五年 | 八 | 〇 | 七 |
| 千八百四十六年 | 十 | 〇 | 十 |
| 千八百四十七年 | 十一 | 三 | 八 |
| 千八百四十八年 | 十二 | 〇 | 十二 |
| 千八百四十九年 | 六 | 一 | 五 |
| 千八百五十年 | 十 | 三 | 四 |
| 千八百五十一年 | 九 | 一 | 六 |
| 總計 | 三百二十五 | 二十三 | 二百九十五 |

右總計三百二十五箇死刑宣告中本刑施行二
十三人特赦二百九十五人令計三百十八人残
り七人有り就中其二入ハ死亡(一)ハ千八百四
十四年一ハ千八百四十五年(亦他五人ノ罪状
ハ謀殺及ヒ國賊ナリシカ皆ナ脱シテ其踪跡
ヲ込セシヲ以テ不席裁判申渡：係ル(千八百
五十年中三人千八百五十一年中二人)

(三)号

宇漏生國、於千八百三十三年ヨリ同ク四十一年迄全九年間及、千八百五十四年ヨリ同六十七年迄全十四年間裁判セシ死刑罪表

甲 千八百三十三年ヨリ同ク四十一年迄

百三十七年全四十九人
百五十七年全四十九人

年數 謀殺故殺 殺兒 強盜 強劫 故ラニ準備セシ放火 貨幣 贋造

千八百三十三年 三百八十五 百六十五 四百十二 四百三十一 百六十一

千八百三十四年 三百九十六 百六十一 四百十五 五百三十 百七十

千八百三十五年 四百〇八 百八十五 四百五十 六百零七 百六十七

千八百三十六年 二百五十三 七十一 二百九十九 三百零三 百二十九

千八百三十七年 二百二十九 六十九 二百三十一 三百五十二 百十四

千八百三十八年 二百二十四 五十七 二百零四 三百零七 百二十一

千八百三十九年 二百六十三 三十八 百九十三 四百零四 百二十六

千八百四十年 二百二十四 四十三 二百二十二 三百一十 百十三

千八百四十一年 二百零六 六十三 百八十一 二百零七 百七十三

乙 千八百四十五年ヨリ同ク六十七年迄

全國人口 千八百五十四年 千六百九十二万三千七百三十一人
千八百六十七年 千九百六十七万五千三百十八人

年數 謀殺 故殺 殺兒 強盜 強奪 故ラニ準備セシ放火 自他世ニ危險ナル事業 貨幣 贋造

千八百五十四年 八十七 三十七 五十四 百三十一 二百五十一 百二十二

千八百五十五年 百十一 二十五 三十八 二百零六 二百七十一 五十六

千八百五十六年 百 三十八 六十一 二百零七 二百二十四 百〇六

千八百五十七年 百〇七 五十四 七十 二百九十九 二百九十四 六十二

千八百五十八年 七十八 四十一 六十六 百九十五 二百零四 三十九

千八百五十九年 六十七 二十八 七十 百八十七 二百十三 四十一

千八百六十年 八十九 四十 二十六 百四十六 二百十六 六十

| | | | | | | |
|---------|-----|----|----|------|-----|-----|
| 千八百六十年 | 九十 | 三二 | 六三 | 百六六 | 百六 | 三十七 |
| 千八百五十九年 | 百九 | 三三 | 六四 | 百九十一 | 百四三 | 九十二 |
| 千八百五十八年 | 百二 | 三四 | 六五 | 百九十八 | 百五九 | 五十七 |
| 千八百五十七年 | 百十 | 三五 | 六六 | 百九十九 | 百六五 | 六十九 |
| 千八百五十六年 | 百〇四 | 三六 | 六七 | 百九 | 百七一 | 三十四 |
| 千八百五十五年 | 百〇二 | 三七 | 六八 | 百零五 | 百七四 | 八十九 |
| 千八百五十四年 | 百零九 | 三八 | 六九 | 百一十 | 百八三 | 九十一 |

甲ノ解 第一年間即チ千八百三十三年ヨリ
同ク四十一年迄死刑ト為セシ罪科ハ即
チ左ノ如シ
九ノ謀殺故殺及ヒ救見(初生ノ子リ救ス
モノ)一切但シ列尹州中ニ於ル通常故殺
ハ此限ニアラス

併、強盜及ヒ街上強賊ニシテ其被侵者
死スルカ又ハ死ス一キ程ニ疵傷リ員ウ
シメシ場合
放火但シ之レニ依テ死亡又タハ甚シキ
重傷ヲ負フ者有リシ場合
附リ列尹州放火律ハ其條例稍々煩冗
ナリ
又タ千八百三十五年迄金銀貨幣鑄造ヲ
死刑ト為セシハ唯シ列尹州ニナリシ
カ本年四月十八日勅諭ヲ以テ全宇漏生
國法律綱領ヲ施行セシ以後ハ全ク此死
刑ヲ廢止セリ

乙ノ解 第二年間即チ千八百五十四年ヨリ

同ク六十七年ニ至テハ千八百五十一年
ノ刑法書ヲ用ヒ凡ク死刑ト為スモノ左
ノ如シ

謀殺一切

故殺但シ唯刑法書第七十八條ノ如キ
重罪輕罪ヲ犯為タルニ際シ及シ其百七
十九條ノ如キ尊屬ノ親故殺ニ限ルイト
ス

放火(其他總テ世ニ危険ナル重罪設例ハ
侵水ノ如キ是ナリ其犯罪數ハ本表中別
ニ掲載セストイハ平常ニ必ス僅瑣ノモ
ノトス)但シ其人命墜損リ為セシ場合
故兇即チ未婚ノ女出産後直チニ初生ノ

兇ノ被害セシモノ及ヒ強賊貨幣鑄造ノ
諸重罪ニ對シテハ全ク死刑ヲ廢止セリ

甲及ヒ乙ノ解 本表數字ハ唯重罪犯行ノ數
ヲ示スモノナリ

第一年間中ニ於テハ其書具サレ備ワラ
サルヲ以テ右罪科中死刑宣告ニ及ヒタ
ル數得テ考フヘカラズ然レモ

第二年間ニ至テハ守國政表局ニ於テ陪
審裁判表記ノ報告アリル他又ク該冊子
字漏生本部中及ヒ附録(口)号等ニ就テ參
考スヘシ

(ホ)号

ハンノフル州ニ於テ千八百四十年十一月一日

ヨリ(千八百四十年ノ刑法書施行以後)同ク六十
六年ノ終リ迄死刑宣告及ヒ本刑処行表

年数 謀殺 故殺 強盜及ヒ
強盜殺 放火 合計

宣告 処行 宣告 処行 宣告 処行 宣告 処行 宣告 処行

| | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 千八百四十一年 | 三 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 五 | 一 |
| 千八百四十二年 | 四 | 三 | 一 | 一 | 〇 | 一 | 一 | 一 | 二 | 〇 | 八 | 四 | |
| 千八百四十三年 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 一 | 二 | 一 | |
| 千八百四十四年 | 一 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 一 | 一 | 〇 | 六 | 〇 | |
| 千八百四十五年 | 一 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 一 | 一 | 三 | 一 | |
| 千八百四十六年 | 二 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 一 | 一 | 〇 | 四 | 二 | | |
| 千八百四十七年 | 二 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 一 | 四 | 一 | | |
| 千八百四十八年 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 三 | 〇 | | |
| 千八百四十九年 | 三 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 四 | 二 | | |

| | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|---|---|
| 千八百五十年 <small>三月一 日迄</small> | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 二 | 〇 | 二 | 〇 |
| 千八百五十年 <small>三月一 日以後</small> | 一 | 〇 | 二 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 二 | |
| 千八百五十一年 | 三 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 五 | 一 | |
| 千八百五十二年 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 | |
| 千八百五十三年 | 一 | 〇 | 一 | 〇 | 一 | 一 | 一 | 四 | 〇 | 〇 | 八 | 一 | |
| 千八百五十四年 | 六 | 〇 | 四 | 六 | 三 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 九 | 二 | | |
| 千八百五十五年 | 三 | 一 | 二 | 一 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 四 | 二 | | |
| 千八百五十六年 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 三 | 一 | 〇 | 〇 | 六 | 三 | | |
| 千八百五十七年 | 二 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 二 | | |
| 千八百五十八年 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 四 | 二 | | |
| 千八百五十九年 | 四 | 一 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 五 | 〇 | 〇 | 十一 | 一 | | |
| 千八百六十年 | 二 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 〇 | 〇 | 六 | 二 | | |
| 千八百六十一年 | 一 | 一 | 二 | 一 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 六 | 二 | | |

| | | | | | | | | | | | |
|---------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 千八百六十二年 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 〇 | 五 | 一 |
| 千八百六十三年 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 三 | 一 |
| 千八百六十四年 | 二 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 | 十 | 〇 |
| 千八百六十五年 | 四 | 四 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 六 | 四 |
| 千八百六十六年 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 四 | 〇 |

總計

甲九 二十三 二十 五 十五 九 五六一 四百三六

註曰千八百五十年三月一日迄ハ旧裁判断法ヲ用ヒタリシカ爰ニ至ツテ新メテ倍舊裁判断法ヲ設

布ニ排列ヤル年数ハ各種罪科ニ対シ其死刑宣告ニ及ヒタル本年ヲ表スルモノ也
 其死刑ヲ宣告シテ必行セサリシモノハ皆ナ減シテ之レヲ(但シ六箇ヲ除クノ外)終身若クハ有期ノ羈絆刑ニ処セシモノニ係ル所謂其

六箇トハ即チ

一箇謀殺者千八百四十四年死刑必行前死亡
 一箇強盜殺者千八百五十四年自殺ス但シ本人ハ全ク無罪ナリシ一後日ニ至リ初メテ露見セリ

二箇放火人千八百五十年及ヒ千八百五十三年中自殺

二箇重罪者千八百五十年同ク六十五年逃亡ニ係ル

千八百四十三年斬罪ニ行ワレタル放火者ハ其放火ニ因テ二人ヲ燒死セシメシ者也

(三)号

諸國古今諸様ノ立法中謀殺及ヒ放殺罪ニ対ス

諸條例纂輯

篇中諸國立法ノ表題下ニ符号(十)ヲ記シタル
ハ其法已ニ改革シ目今復々施行セラルサル
モノニ係ル

第一 第五世^ハカル^ハ千五百三十二年設立
セル残酷律(十)

第百三十七條 各箇謀殺及ニ故殺ヲ犯セシ者
ハ正シク其無罪ナル理由ヲ徵スル能ハス罪必
ス死刑ヲ要スルモノナリ間々地方ノ慣習、後
ニ豫メ意思ヲ挟ミタル謀殺者ヲ故殺者ト同ク
皆ナ車輪罪ニ擬スルトイ一死此間々宜ク區別
ヲ要スルモノナリ故ニ豫メ意思ヲ挟ミタル謀
殺ハ從來ノ慣習ニ因リ車輪罪ヲ用ユトイ一死

一時激怒、乘シテ為モタル故殺ハ(是レモ亦タ
豫メ意思ヲ挟マサルノミニシテ所謂無罪ノ辨
明ヲ為ス能ハス)刀ヲ以テ斬首ヲ行フ一死又タ
謀殺ノ罪犯中顯貴ノ人若クハ主君ニ対シ及ヒ
夫婦間或ハ知音中ニ於テ之ヲ犯セシ者ハ其死
刑前ニ於テ鉄鐵(釘杖状)ヲ以テ身体ヲ挾剪シ或
ハ体部ヲ痛ク磨擦シテ以テ恐懼ヲ興サシメ後
チ本刑、行フ一死

第二 ハムブルクニ於テ千六百三十年設
立セシ刑法十

第四篇中第十六條謀殺及ニ街上強
賊ノ処刑

謀殺者又ハ街上強賊村落劫迫人等惡意ヲ挾ミ

一人若クハ卑人ヲ欺罔シテ之レヲ殺害スル者
或ハ公然路上ニ於テ襲撃シ又ハ締絞スル者其
刑皆ナ車輪罪

第七十條 故殺ノ刑

其他又夕卒然過激ノ怒リニ乘リ獵銃劔刀小刀
類其他石塊等ノ如キ他人ヲ死傷セシムルニ耐
エハキ凶器ヲ執リ以テ故殺シ為セシ者ハ死刑
ニ処セラルヘシ但シ犯罪者他人ニ加ヘシモノ
ヲ受ケテ以テ更ニ其罪科ヲ償フハキ義ニシテ
之レヲ刑スルニカヨリ以テノ斬首トス

第三 李漏生國ニ於テ千七百九十二年設
立セシ法律綱領(十)

第八百六條 (故殺ノ罪) 凡ソ他人ヲ敵視シテ之

レヲ害スル所業ヲ為シ其挙作ノ次第タルヤ蓋
シ被害者必ス死ニ至ルハキ短令ニシテ果シテ
亦夕之レヲ以テ某甲ヲ殺害セルヲ故殺ノ罪ト
為ス此犯人ハ刀ヲ以テ斬首ニ処セラルヘシ
第八百十二條 仮令犯罪者斯ル場合ニ於テ其
動作人命損害ヲ致サンイコテ類々推察スルニ
シテ未夕豫メ之レヲ必トセストイハレ(第八
百十二條及ヒ八百四十條ノ如ク殺傷スハキ器
具ヲ用ヒシ中)然レモ其罪死ヲ免カレサル者ナ
リ

第八百十五條 然レモ當時ノ情状ヲ詳ニ洞察
スルニ蓋シ犯罪者ノ目的之レヲ殺害セシト欲
スルニ非サルトハ明ナルニ於テハ死刑ヲ減シ

ヲ懲役又ハ城寨禁獄トス

第百二十六條 (謀殺ノ罪) 豫メ人ニ害ヲ加ヘ

ント謀リ熟思シテ以テ故ラニ準備ヲ設ケ因テ

果シテ殺害ヲ成セルリ謀殺ノ罪トシ其刑車輪

罪

第四 ^{バイエルン}：於テ千八百十三年五

月十六日ノ刑法書(十)

第百四十六條 他人ヲ殺サント企テ豫メ思慮

シテ以テ之レヲ決レ或ハ善ク熟圖シテ遂ニ之

レヲ犯為スルモノヨ 謀殺ノ罪トシ之ヲ謀殺ノ罪

ハ刑スルニ死リ以テスヘレ

第百五十一條 豫メ思慮スルニ非テ唯テ怒火

炎熱ノ餘肆マ、ニ他人ノ性命ニ係ルヘキ危険

ノ所業ヲ働キ因テ被害者死ニ及フモノ之レヲ

單純ノ故殺罪トシ之レヲ犯ス者ハ其刑懲役

無期

第五 王國^{ウヰルテムブルグ} 千八百三十

九年三月一日ノ刑法書

第百三十七條 人ヲ殺害スルニ方リ豫メ熟

思シテ以テ其意ヲ決ニ因テ之レヲ犯為スル罪

ヲ謀殺トシ其犯人ハ死ニ處セラルヘレ

第百四十三條 豫メ殺害セント欲スルノ意

思ナリ唯テ激怒ノ間決意シテ之レヲ犯為スル

者ハ論スルニ故殺ヲ以テス其刑十年ヲ下タラ

サルノ懲役トス

第百四十五條 凡ソ別ニ期スル所ノ重罪

ヲ設備セント欲レ或ハ其犯為リ容易カラシメ
ン為メ又タハ之レヲ成就セント欲ハル等カ或
ハ又夕重罪犯行ノ間捕縛ヲ避ケン為メ等ニテ
故殺リ為セシ者ハ其刑終身懲役是九十年八月十
三日ノ成法第一條ニ掲載スル所ナリ往時
ハ之レヲ刑ストモ亦夕死罪ヲ用ヒタリ

第六 公國 グラウレン シワイク ニ於テ千ハ
百四十年七月十日ノ刑法書

第百四十五條 (謀殺) 凡ソ他人ヲ殺害スルニ方
リ豫メ回思熟考シテ以テ之レヲ犯スカ或ハ豫
メ熟考シテ成レタル決意ヲ追フテ遂ニ之レヲ
犯為シ了ル者ハ其刑死罪

第百四十六條 (故殺) 豫メ故意ナク唯一時憤怒
激烈ノ餘決意シテ以テ他人ヲ殺害スル者ハ有

期徒刑ニ処スヘシ

第七 王國 ハシノフル ル千八百四十年八月

八月ノ刑法書(十)

第百二十七條 凡ソ他人ヲ殺害セルト企テ
豫メ熟思シテ以テ之レヲ決シ因テ之レヲ犯為
シ了ル者ハ論ハルニ謀殺リ以テス謀殺ノ罪ヲ
犯ス者ハ其刑死罪

第百三十條 豫メ意思ナク唯夕怒氣燃焦ノ
餘決意シテ以テ他人ノ性命ヲ害傷スルハ所業
ヲ為レ被害者死ニ至ルモノハ論スルニ故殺リ
以テス

第百三十一條 凡ソ故殺ノ罪ヲ犯セシ者ハ
二十年以下ノ徒刑ニ処スヘク若シ又夕故殺者

ノ決意正レク殺害ヲ期セシト頭然ナルニ於テハ
ハ徒刑終身

第八 公國「サキセン、アルテニブルク」千八

百四十一年五月二日ノ刑法書

（併ニ王國「サキセン」千八百三十八年

三月三日ノ刑法書）

第百二十一條 （謀殺）九ツ他人ヲ殺害スルニ方

リ豫メ思慮シテ以テ決意シ追テ其圖ヲ遂クル

者即チ回思熟圖シテ以テ殺害ヲ為スリ謀殺ノ

罪ト云フ其犯者ハ死ニ處セラレハシ

第百二十三條 （故殺）豫メ故意無ク唯一時激怒

湧濟ノ餘他人ヲ殺害スル者ハ十年以上二十五

年以下ノ懲役ニ處セラレハシ

第九（甲）大公國「ハッセン」千八百十一年九月十

七日ノ刑法書

第百五十二條 九ツ太禁ヲ犯シテ他人ヲ殺

サント欲シ豫メ熟圖シテ以テ之レヲ犯為スル

カ及々其所業ハ激怒ニ乘シ初テ成シ了ルトイ

ハ且平昔熟圖セシ決意ニ出ル者ハ食ナ之レヲ

謀殺ト為其刑死罪トス

第百五十三條 曾テ意思ナク唯々憤怒ノ間

他人ヲ殺害セント決意シ之レヲ為ス者ハ論ス

ルニ故殺ヲ以テス故殺者ハ八年以上十六年以

下懲役トス又タ其情狀特ニ重キニ於テハ終身

懲役

右最後ノ處刑ヲ擬スルハ裁判所ニ於テ犯罪ノ

情状特：重キヲ認定スルキニ係ル即チ其昇線
若クハ降線ノ血統親族及ヒ兄弟姉妹或ハ夫婦
間ル他胎孕婦（但シ其胎孕セル状リ認知シテ）及
ヒ公務ヲ取扱フ官吏等ヲ殺害セシ場合是ナリ
第九（二）公國、カサウ、千八百四十九年五月七、

日ノ刑法書（十）

第二百四十五條 凡ク太禁ヲ犯シテ他人ヲ殺
サント欲シ豫メ熟思シテ以テ之レヲ犯為スル
カ又ハ其所業ヲ激怒ニ乘シ初メテ成シ了ルト
イハレ平昔熟慮セシ決意ニ出ワルモノハ皆ノ
之レヲ謀殺トシ其刑懲役終身

第二百四十六條 曾テ意思ナク唯ハ激怒ノ間
チ他人ヲ殺害セント決意シ之レヲ為ス者ハ論

スル、故殺ヲ以テス故殺者ハ六年以上十二年
以下ノ懲役トス又チ其情状特、重キニ於テハ
之レヲ終身懲役トス

右最後ノ死刑ハ裁判所、於テ犯罪情状特、重
キヲ認定スル中、條々云々以下「ハッセン」ノ刑法
條例ニ殊ナルト無し

第十 大公國、バーデン、千八百四十五年五
月六日ノ刑法書

第二百五五條 故意ヲ扶、豫メ熟思シテ他人ヲ
殺シ成、ハ其行業激怒ニ乘シテ成シ了ルトイハ
レ前時思慮シテ之ヲ決定シ續テ包藏セシ意中
ヨリ出ツルモノハ皆チ之レヲ謀殺ト為ス其刑
死罪

第二百九條 豫メ意思ナリ唯激怒ノ間某甲ヲ
殺サレト決意シテ以テ犯為スル者ハ之レヲ故
殺者ト云フ其刑八年以下ヲサレノ懲役トス然
レ其情状ノ輕キニ於テハ八年以上十二年以下
入工役場ニ処ス

第十一 左リシケシ千八百五十年ノ刑法
書

第百十九條 豫メ回思熟固シテ他人ヲ殺サレ
ト意決シ追テ之レヲ犯為スル者ヲ謀殺者ト為
ス其刑終身懲役

第百二十三條 豫メ回思熟固セズ唯々激怒ニ
乘シ卒然他人ヲ殺害スル者ハ五年以上二十五
年以下懲役

第十二 (甲) 王國字漏生千八百五十一年四月

十四日ノ刑法書ハ國及ハ白ル義
有参考スルハ各ニ下ニ其本條
有リ(第十九條)及こ十九(乙)

第百七十五條 人ヲ殺サレト欲スル意思ヲ挾
ミ豫メ回思熟慮シテ以テ之レヲ犯スル謀殺ノ
罪ト云フ其刑死罪

第百七十五條 故意ヲ以テ人ヲ殺ストイハレ
豫メ之レヲ殺サント熟慮セサルモ之レヲ故
殺ノ罪ト云フ其刑終身懲役

第百七十八條 或ハ重罪若クハ輕罪ヲ企テ之
ニテ犯為スルニ際シ其支障ヲ芟除セル為メ或
ハ其犯者中捕縛ヲ避ケント欲スル等ニテ故ラ
ニ他人ヲ殺ス者ハ其刑死罪

第十二(七) 大公國「ブルゲン」千八百五

十三年七月三日ノ刑法書及ニ共

和府「リュック」千八百六十三年六月

二十日ノ刑法書

第百七十五條 (「リュック」刑法書第百四十六條) 人

ヲ殺サレトスル意思ヲ挾ミ豫メ熟思シテ以テ

之ヲ犯スヲ謀殺ノ罪トス其刑終身懲役「リュック」

ニ於テハ之レリ死刑トス

第百五十八條 (「リュック」刑法書第百四十五條) 凡

ク故意ヲ以テ人ヲ殺シ豫メ熟思セズ平然之レ

ヲ犯スヲ故殺ト為ス其刑十年以上二十年以下

懲役「リュック」ニ於テハ二年以上終身間ノ懲役ト

ス

第十三 帝國填地利千八百五十二年五月

二十七日ノ刑法書

第百三十四條 某甲ヲ殺シテ欲シ此目的ヲ

以テ着手ヲ為シ果シテ某甲若クハ他人ノ死ヲ

致スル者之レヲ謀殺ト云フ

第百三十六條 謀殺ヲ遂ケル者ハ其刑死罪

第百四十條 或ハ所業ヲ犯シテ他人ヲ死ニ至

ラシメ便令果シテ殺サレト欲スルノ目的ニ出

デズトイハレ該人ニ或ル他ノ害傷ヲ負ワシメ

ント期セシニ於テハ之レリ故殺ト云フ

第百四十一條 強賊ヲ為サレト欲シ他人ニ對

シテ暴戾ヲ極メ其死ヲ致スニ於テハ此故殺ニ

拘ハリタル主犯從犯トモ皆ナ死罪

第百四十二條 尔他ノ故殺：於テハ其刑五年以上十年以下ノ禁獄

第十三(三) 千八百六十七年墺國司法省刑法

草案 千八百六十八年三月同国民

選設院中刑法委員ノ草案ニ

第百二十三條 (謀殺及ク故殺) 九リ故意リ挾

シ他人殺害スルニ方リ其状ニ様有リ若シ某甲

ヲ殺シント欲スル意思激怒憤懣ノ餘卒然決定

シテ直チ之レヲ犯為スル者ヲ故殺ト為シ然

ラサルモノヲ謀殺ト為ス

第百二十五條 謀殺ノ特：重キモノタルヤ

曰ク強盜謀殺路上強賊殺、暗殺、昇線若クハ降線

ノ親族或ハ夫婦間ノ謀殺是ナリ

第百二十六條 九リ謀殺ヲ遂クルニ於テハ

主犯者(本犯首犯及ク首佐)ハ奔レク皆テ死刑ト

ス又テ僅カニ連累セル從犯者ハ懲役八年以上

十二年以下(但シ第百二十五條ノ如キ場合ニ

於テハ尚ホ長ク之レヲ科シ得ヘシ)

第百二十八條 強賊ヲ為カニ方リ故殺ヲ遂

ケシモノハ之レヲ強賊故殺トシ其首罪者死刑

尔他ノ故殺ヲ遂クルニ於テハ其首罪者八年以

上十二年以下ノ懲役トス(但シ二百二十五條ノ

如キ場合ニ於テハ懲役十二年以上二十五年以

下トス)

第十四 王國憲法千八百五十五年八月十

一日ノ刑法書

第百二十五條 凡ソ故意ヲ決シテ
他人ヲ殺シ其所為タルヤ豫メ
回思熟慮シテ以テ之レリ
犯スリ謀殺ノ罪ト云フ其刑終
身懲役ニ係ルハ百七十ハ年十
月一日ノ成法ニ係ルハ往時
ハ之レヲ死刑ト爲レタリ
第百五十六條 若シ又夕禁令
ヲ犯シ故ラニ他ノ人ヲ害セ
シテ豫メ熟思セル決定ニ係
ラサルハ八年以上三十年以下
懲役トス

第十五 王國ハイエルン
千八百六十一年十一月十日
ノ刑法書

第百二十八條 人ヲ殺サント
スル目的ヲ決シ及履熟思シ
テ太禁ヲ犯シ其死ヲ致スル
之レハ謀殺ト云フ其刑死罪

第百二十九條 他人ヲ殺サ
ント欲シ熟思スルニ違テ平
然禁令ヲ冒シ其死ヲ致スモ
ノハ之レヲ故殺者ト云フ其刑
十二年以上二十年以下懲役

第百三十條 身縁ノ親族故
殺ハ其刑終身懲役
第十六(甲) 共和府ハム
ブルグニ於テ千八百六十四
年ノ刑法草案

第百二十三條 (謀殺)豫メ
人ヲ害セント欲シ熟思シテ
以テ定メタル決意ヲ違ヒ
之レヲ犯為スル者ハ懲役十
五年以上二十五年以下トス
然レモ盜賊ヲ目的トシ本犯
及ビ共犯者トモ毒劑若クハ
放火ノ如キ慘酷ナル所業
ヲ以テ胎孕婦(其

胎孕セル状ヲ認知シテ自家親屬若クハ官吏(其
公務取扱中)ヲ殺害スルニ於テハ其刑皆死罪
然レモ第二十六條ニ掲クル如キ事由(寛恕スル
キ情状)見然スルニ於テハ死刑ヲ減シテ懲役二
十五年トス

第百二十四條 豫メ熟思スルニ無ク唯ク激怒
ノ餘殺害セシト決意シ之レヲ行フ者ハ四年以
上十五年以下懲役

第十六(五)共和府「グレメン」千八百六十七年
ノ刑法草案
第九十八章中第二百四條 (謀殺)豫メ人ヲ害セ
ント謀リ追テ之レヲ犯スヲ謀殺ト為ス其刑終
身懲役

然レモ其情状極メテ重ク設例ハ嚮キニ犯為セ
ル謀殺ヲ以テ已ニ終身懲役ニ処セラレタル者
更ニ謀殺ヲ犯ス如キハ亦之レヲ死刑ニ処シ
得ヘシ

第九十九章 故殺
第三百五條 故意ヲ以テ人ヲ殺シ預メ熟圖セ
サルモ之レヲ故殺ノ罪ト云其刑二年以上十
八年以下懲役

第三百六條 左ノ故殺ヲ犯ス者ハ其刑十年ヨ
リ少ナカラサル懲役トス

第一 昇線ノ親屬故殺
第二 或ル重罪ヲ企テ之レヲ犯為ノ支障
ヲ芟除セシ為メ或ハ捕縛ヲ避ケン

ト欲レ故ク人ヲ殺ス者是ナリ
第十七 列尹河傍^{ルベシ}州ニ於テ千
八百五十九年ノ刑法書

第七十一條 豫メ意思ヲ挾ミ太法ヲ犯シテ他
人ヲ殺害スルモノ初メ其之レヲ企ツルニ方ワ
テヤ熟思シテ以テ決定シ次テ之レヲ行フ者其
罪ヲ謀殺ト云謀殺ノ刑ハ死罪

第七十二條 豫メ熟思セス唯^ニ平心顛覆ノ間
タ他人ヲ殺サント欲シ之レヲ犯スハ其罪ヲ故
殺トス

故殺ノ罪ハ情状ノ輕重ニ應シ十五年以上懲役
ニ処セラレトシ

第十八 州千八百六十六年刑法

草案

第百十五條 豫メ人ニ害ヲ加ヘント謀リ熟思
シテ以テ法ヲ傷リ之レヲ犯スヲ謀殺ノ罪ト云
フ謀殺ヲ犯ス者ハ其刑終身懲役又タ懲役ヲ嚴
ナラシメシメテ為メ孤繫囚ニ処スルハ有ルベシ

第百十六條 故クニ他人ノ死ヲ致ストイハレ
豫ム之レヲ犯サント圖ラサルモノリ故殺ト云
フ故殺ハ其刑五年以上十五年以下懲役

第百十七條 此処刑ヲ長クシ延テ終身ト為ル
ノ場合有リ即チ或ル重罪ヲ準備セント欲シ或
ヒハ其犯者ノ採取リヲ容易トラレメント欲シ
又タ之レヲ成就セシメント欲スルカ他犯
罪者若クハ其奪掠物ヲ保庇セントメ故殺ヲ為

スモノ是ナリ

第百十九條 昇線ノ骨内親族故殺ハ十年以上終身刑懲役トス

第十九(甲)千八百十年佛國刑法書

第二百九十五條 故意ヲ以テ人ヲ殺スル故殺ノ罪ト云フ

第二百九十六條 豫メ人ニ害ヲ加ヘント謀リ又ハ人ノ来ルヲ待テ受ケ害ヲ加ヘント為レ之レヲ殺レタル罪ヲ謀殺ノ罪ト云フ

第二百九十七條 豫メ人ニ害ヲ加ヘント謀リタルトハ害ヲ加フル前ニ其害ヲ加フ一キヲ豫定セシメ又ハ相會ス一キ人ノ入体ニ對シ害ヲ加ヘント謀ルヲ云但シ其謀意或ル景況ニ

管シ又ハ或ル約定ニ管シタル内トイハレ亦同上トス

第二百九十八條 人ノ来ルヲ待テ受ケ害ヲ加ヘント為ストハ一箇又ハ數箇ノ地ニ於テ多少ノ時間人ノ来ルヲ待テ之レヲ殺サント為シ又ハ暴行ヲ加ヘント為スト云フ

第二百九十九條 尊属ノ親ヲ殺スノ罪トハ法ニ適シタル父母又ハ法ニ適セサト父母又ハ養父母其他法ニ適シタル尊属ノ親ヲ殺スル云

第三百條 子ヲ殺ス罪トハ初生ノ子ヲ殺スル云

第三百一條 毒殺ノ罪トハ毒物ヲ用ヒタル方法及ヒ効驗ノ如何リ尚ラス遲速ヲ論セス九ノ

人ヲ殺スハキ物ヲ用ヒ以テ人ノ性命ヲ害スル
ヲ云フ

第三百二條 謀殺ノ罪尊屬ノ親ヲ殺ス罪毒殺
ノ罪ヲ犯セル者ハ死刑ニ処セラルヘシ但シ此
規則ト尊屬ノ親ヲ殺スニ付テ第十三條ニ記ス
ル規則ト相觸ルトナカル可シ

第三百四條 故殺ノ罪ヲ他ノ重罪ノ前ニ犯シ
又ハ之レト同時ニ犯シ又ハ其後ニ犯ス時ハ犯
人ヲ死刑ニ処スヘシ

輕罪ヲ犯ス設備ヲ為シ又ハ其罪犯ヲ容易ナラ
シメ又ハ其罪犯ヲ行フヲ以テ目的ト為レ或ハ
其罪犯ノ首謀及ヒ附從ノ逃亡ヲ助ケ又ハ其刑
ヲ免レシムルヲ以テ目的ト為レ故殺ノ罪ヲ犯

シタルキハ亦其犯人ヲ死刑ニ処スヘシ
總テ其他ノ場合ニ於テハ故殺ノ犯人ヲ無期ノ
後刑ニ処スヘシ

第十九(五) 白耳義千八百六十二年六月八日

公布セル刑法書

第三百九十三條 故意ヲ以テ人ヲ殺スヲ故殺
ト云フ其刑終身懲役

第三百九十四條 豫メ人ニ害ヲ加ヘシト謀リ
以テ殺シタル罪ヲ謀殺ト名ツク其犯人死刑ニ
処ヤラルヘシ

第二百九十四條 尊屬ノ親ヲ殺スノ罪トハ法
ニ適シタル父母又ハ尊親屬又ハ法ニ適セサル
父母ヲ殺スリ云其犯人ハ死刑ニ行フヘシ

第三百九十七條 毒殺ノ罪トハ九ヲ毒物ヲ用
ヒタル方法及ヒ効驗ノ如何ヲ問ハズ遲速ヲ論
ビテ人ヲ殺スルモノ物ヲ用ヒテ人ノ性命ヲ害スル
ヲ云フ該犯人ハ死刑ニ行フヘシ

第二十 王國伊多利亞千八百六十八年ノ
刑法草案

第二十一 王國デ子マロク千八百六十六
年二月十日ノ刑法書

第百五十六條 故意ヲ以テ人ヲ殺スルヲ故殺ト

云フ其犯者ハ年以上終身間懲役ニ處セラレ
ニ又ク其情狀特ニ重キニ於テハ之レヲ死刑ト

第百九十條 豫メ人ニ害ヲ加ヘント謀リ熟考

シテ以テ之レヲ殺スルヲ謀殺ト云フ其犯人死刑
ニ處セラレルヘシ

第二十二 王國瑞典千八百六十四年二月
十六日ノ刑法書

第十四章中第一條 某甲ヲ殺サントスル目的
ヲ持シ豫メ熟考シテ以テ其死ヲ致スル謀殺ノ

罪ト云フ之レヲ犯ス者ハ死刑若クハ終身苦役ニ処スヘシ

第三條 素ト被害ロシトスルノ目的ヲ持セヌ唯ハ一時激怒ノ餘敢テ他人ノ性命ヲ奪フ者ハ之レヲ故殺ノ罪ト為シ終身又ハ十年間懲役ニ処スヘシ

第二十三 英國普通法

謀殺ノ罪トハ直接又ハ間接ノ惡意ヲ挾ミ豫メ熟圖シテ太法ヲ犯シ人ヲ殺スヲ云フ其間接ノ惡意トハ害ヲ加ヘレト豫定セシ人ニ對シ正シキ仇怨無ク又少理由ナクシテ唯他ニ期スル所ノ重罪ヲ遂ケン為メ豫メ熟圖シ敢テ此兇意ヲ逞フセントスルノ企テヲ有スルヲ云フ

云フ

故殺ノ罪トハ直接及ヒ間接ノ惡意ヲ有セヌ唯一時怒火焰上ノ餘太法ヲ犯シ肆ヒ他人ヲ殺スモノ又ハ不法ノ所業ヲ犯サレト欲シ素思ニ出テストヘニ適カ之レヲ殺スヲ云フ

謀殺ノ罪ヲ犯セシ者ハ其刑死罪

千八百六十四年議院中刑法委員ノ立説、於テハ死刑ニ処スヘキモノハ唯々謀殺ノ一罪種類ニ限ルトセリ其一罪種類タル即チ左ノ如シ直接ノ惡意ヲ以テ人ヲ害セシト欲シ豫メ熟圖シテ被害ヲ為セル罪或ハ

或ハ重罪即チ謀殺放火強盜夜中押込強賊海賊等犯為ノ際タニ因テ為セル被害是ナリ

第二十三 北亞米利加諸國

北亞米利加諸國中英國刑法ニ憑拠シ資テ以テ之レリ施行スル各國ノ刑法ニ於テ謀殺ノ一等種類ニシテ死刑ニ処スヘシト為スモノ左ノ如シ

○ニウヨルク千八百六十年ノ成法

(甲) 人ヲ殺サント欲シ熟考シテ以テ犯為セル殺害

(乙) 殺サント欲スル目的ニ出テストイハレ九ツ人命危険ニ係ル所業及ヒ人命ヲ蔑如セン傲邪ヨリ興リタル所為ヲ以テ殺害ヲ為セル罪

(丙) 放火ニ因テ人死ヲ為セルモノ是ナリ

○マサチュセツ千八百五十八年ノ成法

豫メ人ニ害ヲ加ヘント熟思セシ惡意ニ係ル謀殺

死刑又ハ終身禁錮ニ科ス一キ程ノ重罪犯為成ハ其試ニニ因ラ為シタル殺害

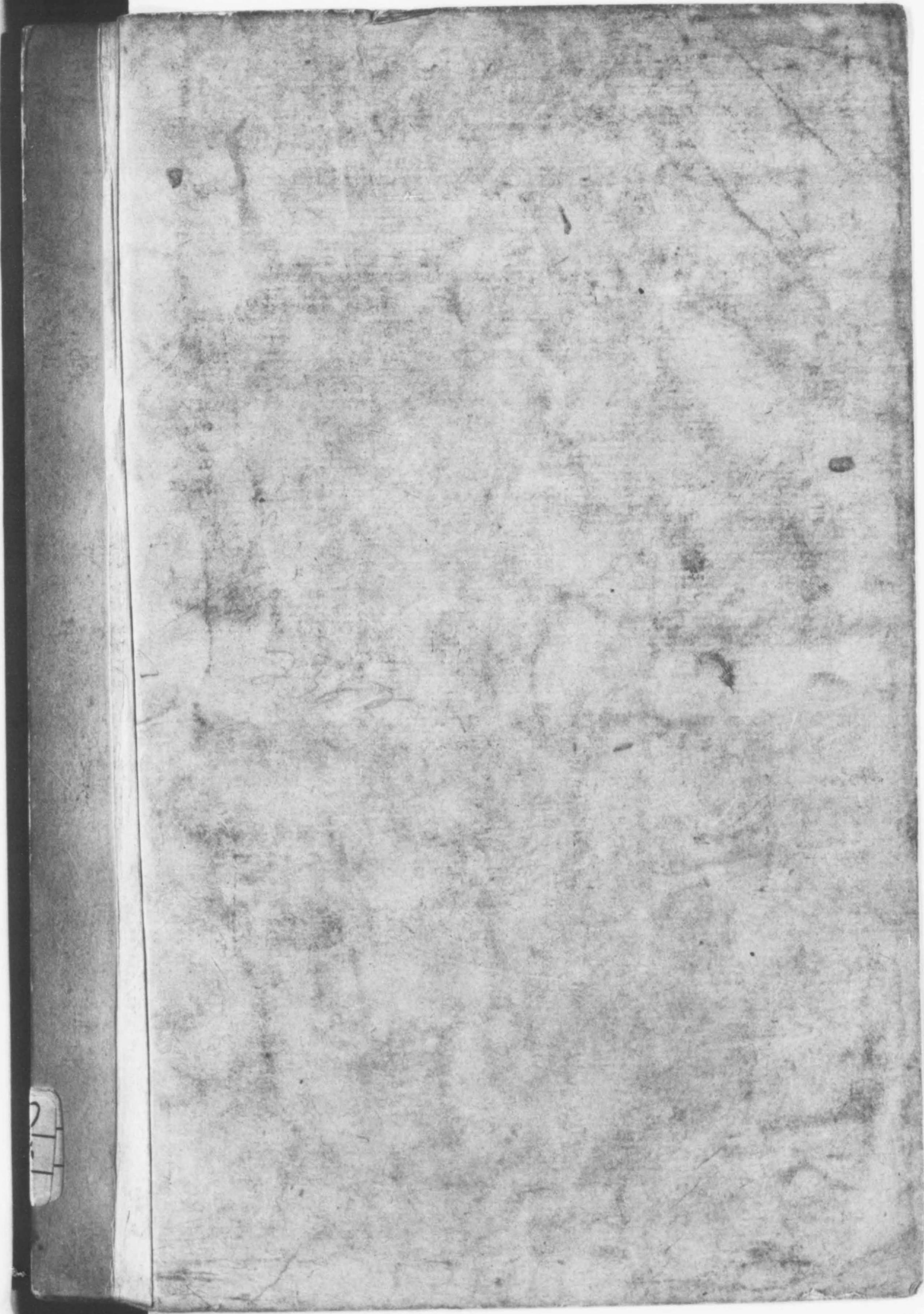
○マイソノ新律

(甲) 直接又ハ間接ノ惡意ヲ挾ミ以テ人ヲ殺サント為シ豫メ熟思シテ太法ヲ傷リ殺害ヲ為スモノ

(乙) 豫メ直接ノ惡意ヲ持シ熟思シテ殺害ヲ為ス罪尔他死刑若クハ終身禁錮ニ処ス一キ程ノ重罪犯為中ナリ又ハ之レヲ試ムルニ方リ殺害ヲ為スモノ是ナリ

死刑論終
伯靈御用密書印刷局

印刷入ル、フ、デウケル



2
1